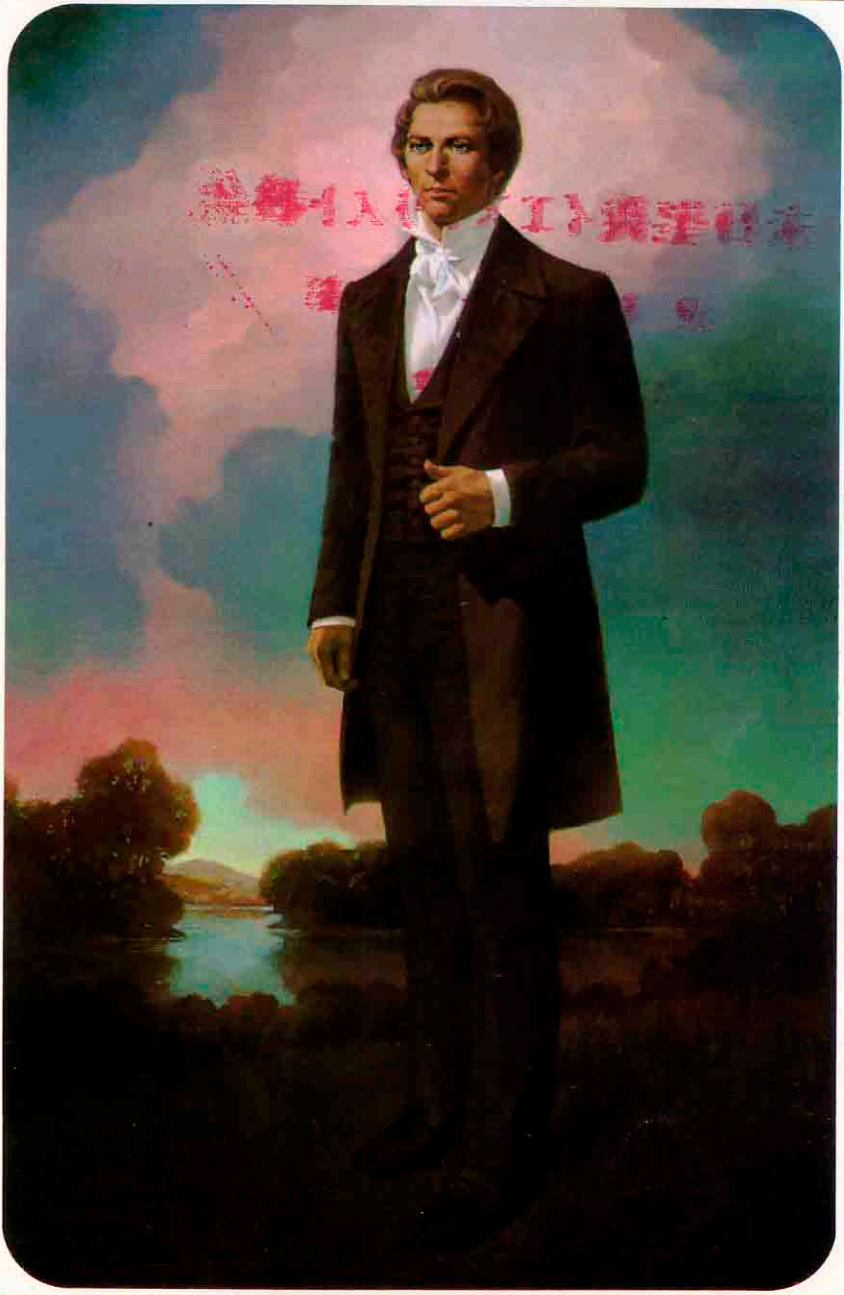
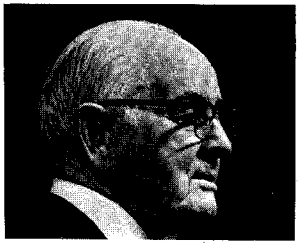
聖徒の道　1978年6月20日発行（毎月1回20日発行）　第22巻第6号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道 6 1978





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会
スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会
エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイブレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

顧　問
マリオン・D・ハンクス
ロバート・D・ヘイルズ
ディーン・L・ラーセン
リチャード・G・スコット

教会誌編集主幹
ディーン・L・ラーセン

国際機関誌
ラリー・ヒラー（編集主幹）
キャロル・ラーセン（編集副主幹）
ロジャー・ギリング（デザイナー）

「聖徒の道」
八木沼　修一（翻訳部長）

もくじ

結婚によってひとつとなる……スペンサー・W・キンボール…… 1
結婚生活を変えるには，まず自分を変えること……アフトン・J・ディ…… 6
「あなたが代価を払えば」……リン・デル・マー……11
母親の力……バーバラ・B・スミス……14
質疑応答……16
女性のための記念碑……モアナ・ベネット……17
ローカル・ニュース……18
ひとつの新しいこと……アリス・ストラトン……21
かぞくはなんにんでしょう？……ジョン・アンネ・オルセン……23
イエスと弟子たち……セルマ・デ・ヨング……24
もうひとつの勇気……マウリーン・エプスタイン……26
独身時代の祝福……アン・G・オズボーン……31
伝道する大管長の姿を見て……ジェームズ・O・メイソン……34
26人の青年の胸を打った……ジョン・A・グリーン……38
末日の予言者の古典……41

聖徒の道 6月号
発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5—8—30
印刷所　株式会社　精興社
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4—9—19
定　価　年間予約1,700円　1部150円
海外予約1,700円
INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号　東京0—41512
口座名　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

結婚によって ひとつとなる

大管長
スペンサー・W・キンボール

誉れある，幸せな，実り多き結婚生活は，普通の人ならだれもが目指す大切な目標である。結婚は人が決心することの中で最も大切なものであり，また最も大きな影響を及ぼすものであろう。なぜならば，結婚は目前の幸せばかりでなく，永遠の喜びをももたらすからである。またこれは，当事者ふたりだけでなく，その家族，特に子供や孫，さらにその子孫に影響を及ぼすものである。

従って，永遠に連れ添う伴侶を選ぶにあたっては，細心の注意を払って計画し，考え，祈り，断食をして，最も大切なこの決定を下

すようにしなければならない。そうすれば，決断を誤ることはないであろう。真実の結婚生活には，心と感情の一致が必要である。

テレビ映画や小説では，たいてい主人公が結婚したところで物語が終わる。「こうしてふたりは末長く幸せに暮らした」と。しかし私たちは，結婚式を挙げるだけでは幸福になれないし，実り多い結婚生活も営めない。幸福は電灯のようにスイッチを入れさえすればよいというものではない。幸福は心の状態であり，自分自身の内部からもたらされるものである。幸福は努力して得るものである。金銭で売買したり，待っていて得られるようなものではない。

ある人々は，幸福というと，安易で，ぜいたくで，いつもスリルに富んだ華美な生活を想像する。しかし，本当の結婚は，私心をなくして相手に与え，仕え，分かち，犠牲を払うところからもたらされる幸福をその基とするのである。

異なる環境の下で育ってきたふたりは，結婚式を挙げると間もなく，避けることのできない現実の姿を知る。そして，責任を負い，新しい義務を引き受けなければならない。個人的な自由をある程度制限し，いろいろな面で私心をなくし，夫婦間の調整を図ることが要求される。

また，結婚してしばらくすると，以前に気づかなかった，配偶者の欠点を知るようになる。その上，結婚前にいつも目に映った様々な

キンボール大管長御夫妻

徳が次第にその姿を消し，以前にはごくわずかでそれ程気にならなかった欠点が，大きく頭をもたげてくる。それに続いて，相手の心を理解し，自己評価し，良識を働かせ，夫婦の関係を密にする計画を立てる時期が訪れる。

経済上の調整を図ることを忘れている夫婦もいる。ある若い妻はぜいたくな生活をしたいがために，家庭の務めを放り出して，職場に仕事を求める。こうして夫婦で共かせぎするようになると，家庭には協力の精神ではなく，不和が芽生えてくる。疲れ切って帰って来るふたりの神経は高ぶり，尊大となり，自己中心となり，そして誤解が生じるからである。

結婚生活は容易ではない。感情の行き違いや挫折感を味わうことも多い。しかしその一方で，永続する真実の幸福を得ることも可能である。それは人の心で推し測ることのできない大きな喜びとなり，しかもすべての夫婦，すべての人々がそれを手にできるのである。あらゆる努力を払い，よく祈って，最も麗しく一致のある生活を営める相手を見いだすように努める時，確かにすべての若い男女は，幸福を得，実り多い結婚生活を営むことができるのである。しかしそのためには，ふたりが進んで代価を払わなければならない。

すべての夫婦に永遠の幸せな結婚を保証する，絶対に確実な公式がある。しかしどのような公式についてもそうであるが，必ず守らなければならない大切な要件がある。ふさわしい相手を選ぶことや結婚式後も思いやりを

持ち続けることも大切であるが，何と言っても，結婚生活をどのように営むか，これが最も重要である。しかもそれを実りあるものにするのは当人なのである。

結婚生活の幸不幸は，経済，社会，政治，その他の諸情勢が関係しているように思われるかもしれない。しかし第一に影響を与えるのは夫婦自身である。ふたりが決意し，私心をなくし，正義に従うならば，必ず結婚生活を実りあるものとすることができるのである。

そのための公式は簡単である。

まず第1に，ふさわしい結婚相手を選ぶこと。自分にとって大切な事柄のすべての面でできるだけ完全に近い配偶者を選ぶようにする。

第2に，私心をなくすこと。すべてを家族の益のために行なわなければならない。

第3に，愛を保ち，さらに大きくするために，愛情と思いやりの表現を継続すること。

第4に，イエス・キリストの福音の中に明らかにされているままに，主の戒めに完全に従って生活をすること。

以上の事柄を正しく守り続けるならば，不幸になり，誤解が続き，不和が生じる余地は全くない。

すなわち，このような結婚生活を送る夫婦は，犠牲を払い，協力し合い，自分の欲求をある程度抑える。また，経済的，肉体的，精神的な負担に耐えて子供をもうける。その結果として，他では得られない最高の気持ちを味わうことができる。

結婚するまで，人にはそれぞれ自分の意のままに行動する自由があり，人生設計も思い通りに行ない，自分を中心にすべてのことを決定できる。しかし，結婚する男女は，どちらか一方の益よりもふたりの新しい小さな家庭の幸せを常に優先するという誓いを文字通り完全に守る必要のあることを，その誓いを立てるに先立って認識しなければならない。物事の決定を下すにあたっては，それによって影響を受けるのは自分だけではないことを十分に考慮しなければならない。妻は，重大な決定を下す時に，それが両親と子供たち，家庭，それに自分たちの霊的な生活に及ぼす影響を考えなければならない。また夫は職業や社交，友達づき合い，趣味を決める場合，家族の一員として，家族全体のことを考慮して行なう必要がある。

結婚生活は必ずしも平穏無事とは限らないが，家庭を平安なものとすることは可能である。貧乏，病気，失望，失敗，さらに家族の死にさえ直面するかもしれない。けれどもこれらも平安を奪い去ることはできないのである。結婚生活は，利己心の入り込む余地を与えない限り，実り多いものとすることができる。しかも，利己心を完全に廃した夫婦は，困難や問題に直面することで，その結び付きを2度と切れない程に強くすることができるのである。例えば，1930年代の不況時の離婚は，ごくわずかであった。それは，貧困，欠乏，失望が，夫婦の絆を強めたためである。そのように，繁栄は夫婦の絆を断つが，逆境は絆を強めるのである。

また，利己心をなくすと，実り多い結婚生活の中に今ひとつの要素が生まれてくる。すなわち，相手の関心事に心を留め，相手の慰めと幸福を求め続けるならば，結婚前に芽生え，結婚と共に結び合った愛情は，ますます深くなるであろう。

本当に幸福な結婚生活を営むためには，主の戒めを忠実に守ることが必要である。独身

者，既婚者を問わず，人は皆，義しくない限り，本当の幸せは得られないのである。

真実の教会を知っていて，福音にかなった生活を送りたいと考えていながら，教会に活発に集わない人は，決して幸福を得ることはできない。不活発な生活は結婚生活を破壊するものである。

結婚は神によって定められたものであり，単なる社会の慣習ではない。従って，ふさわしく実り多い結婚生活としない限り，人は決して昇栄できないことだろう。主のみ言葉にあるように，結婚することは正しく，ふさわしいことである。

自分自身よりも主を愛し，また自分以上に配偶者を愛して，福音を基としてその計画に完全に合致した生活を営む夫婦は，この大きな幸せを必ずや得るに違いない。

夫婦がそろってたびたび聖なる神殿へ行き，家族と共にひざまずいて祈り，教会の集会に出席し，思いにおいても肉体においても完全に清い生活を送り，自分のすべての思いと望みと愛を伴侶に向け，さらに神の王国を築くために力を合わせるならば，幸福が訪れることだろう。

「汝ら誠心を以て妻を愛してこれと結び合うべし。その他の者に愛着することなかれ。」（教義と聖約42：22）これは主のみ言葉である。

このみ言葉は，次のように言い換えることもできる。「汝ら誠心を以て夫を愛してこれと結び合うべし。その他の者に愛着することなかれ」と。にもかかわらず，母親や父親や友達に愛着する人々をしばしば見受ける。また母親がいつまでも子供たちのことに口出しを続ける場合もある。さらに，いろいろな事柄は自分の伴侶に相談すべきであるにもかかわらず，父親や母親のもとに行って相談し，助言を求め，力を借りようとする夫や妻がいる。しかし，夫婦間の事柄は他の人々に口外せず，ふたりの間だけのことにすべきである。

結婚をしたならば，親から独立すべきである。そして，伴侶を愛し，その助言を大切にし，ふたりの結び付きを尊ぶ。しかし，伴侶から助言を受けたら，祈りの気持ちをもってよく考え，自らの判断力を働かせて決定を下し，それを生活に取り入れる。また，夫婦は家庭をひとつにするだけでなく，もっと親密な結び付きがなければならない。

「而してこの二人の者一体となるべし。すべてこれは，この世の造られたる目的に適わんためなり。

すなわち，この世のいまだ創られざる前に人の創られしに従いて，人間の数のこの世に充たされんためなり。」（教義と聖約49:16—17）

兄弟姉妹，これは主のみ言葉である。極めて重要な勧告である。何人も主に反論することはできない。なぜなら，主は地球を創造し，民を創造し，もろもろの事柄を御存知である。そして主は，計画を定められた。私たちは，これらの重要な事柄について主と議論できる程，知性は優れていないし，賢明でもない。実に主は，何が正しく真実であるかを御存知なのである。

私たちは皆さんに，これらの事柄について考えていただきたいと願うものである。皆さんは申し分のない結婚生活を送り，立派な生活を営み，結婚生活をより良くするように努めていただきたい。

（1976年9月7日，ブリガム・ヤング大学における説教より）

結婚生活を変えるには，

まず自分を変えること

アフトン・J・デイ

最近高校時代のひとりの友人に会った。話は自然に夫婦と子供のことに移った。ところが，アンが元気なく「ジョニーは教会にあまり活発でないの」とか，言いわけめいた口ぶりで「今はコーヒーを飲んでいるの。ジョニーが飲むので，それに合わせた方がいいかと思って」と言うのを聞きながら，私の心は穏やかではなかった。

日曜学校の教師が家族関係の改善を促す本を薦めた時にも，同じような経験をした。バプテスマを受けたばかりの教会員が寂しそうな顔をして，「夫婦で読まなければ何にもならないでしょう。でも，私の妻は教会から持ち帰る本は，全く読もうとしないんです」と言っていた。

理想的な家庭の模範を見て，失望する教会員は多い。ある人は，父親が神権を行使し，妻が夫をよく助ける立派な日の光栄の王国にふさわしい家族の話が出ただけで，絶望的な気持ちや，時には憎悪さえ抱くことがある。そのような家庭像が描けずに，自分の家族は月の光栄の王国にしか行けないと考えたり，意識するにせよしないにせよ日の光栄の王国に行けそうな家族に対して拒絶感を抱く人々は大勢いる。そのような拒絶感は，人の自由意志に足かせをはめようとする巧みな誘惑の

ように思われる。私たちはみな，ただ自分だけをコントロールする自由と責任を与えられていて，人を束縛してはいけないと教えられている。しかし同時に私たち教会員は，霊感と感化を及ぼしなさいと勧められている。そうであるとすれば，まず私たちが行なわなければならないことは，人の自由意志を侵害するものが何で，私たちにできることは何かという認識を持つことではないかと思う。

夫婦のどちらか一方，あるいは両方が不快な状況に直面した時に，それを好転しようと計画も努力もせずに毎度お手上げているようでは，結婚生活は硬直化してしまう。そうすると，次のような状態になることが予想される。

1．相手のことを口実にして最善の努力を払おうとしない。「ぼくが何かしてやっても，妻は喜んでくれたためしがない。だからわざわざすることもないだろう。」「ジムは家の中がきれいであろうと汚れていようと一向に気にならないみたい。これでは一生懸命に掃除するだけ損だわ。」

2．事態を変えるのに効果のない方法を使ってしまう。文句（「このじゅうたん，まるで2年も掃除していないようだね。」），不平（「主人は教会に少しも関心がないの。あなたのように家庭に神権者がいる人たちがうらやましいわ。」），正当化（「妻が助けてくれさえすれば，ぼくだって良い父親になれるのに。」），おどかし，交換条件，最後通告など。正直な気持ちはそうかもしれないが，目標を達成するのにこれらは何の役にも立たない。小言や強制やあてこすり，文句，不平，正当化，交換条件などが，家庭内の目標達成に何の効力も持たないとしたら，何をすればよいのだろうか。

第1．結婚生活の目標として何が価値があるかをはっきりさせる。幸せな家庭，クリスチャンらしい雰囲気，進歩成長の気風，これらはいずれも時間と労力を費やす価値の十分あるものである。反対に，相手の個性を自分の好みに合わせようとするような目標は，救い主の御計画に添わず，必ずや，日の光栄の関係に不可欠な愛と相互の尊敬を損うようになることだろう。

第2．親子，師弟，夫婦など，どの人間関係にも大切なのが，相手を心から尊敬することである。自分の気に入った点だけを表面的に尊敬するのではなく，真心から尊敬する。それには，何であれ，相手の権利を一切尊重することが含まれる。人間の神聖な行く末を理解し，福音の標準を厳密に守っていれば，この種の尊敬というものは，はじめは難しく思われても，絶対に必要であることがわかるはずである。

第3.「権力闘争」を避ける。これは良い家族関係を築く上でよく見られる障害である。意識して夫婦で「権力闘争」を繰り広げる末日聖徒はいないと思う。私たちは，夫が家庭の長であり，妻が夫の助け手であることを信じている。しかし中には，頭ではわかっていながらそれと気づかないまま，相手の上に立ちたい，自分の言いなりにさせたいとやっきになる女性がいる。くず入れをきれいにするのはだれの責任か，家の中がいつも汚い，夕食にどの友人を招待するかでいつも衝突する。このようなことは，我の張り合いか意固地の表われであると思う。結婚生活においては，棚の整理やくず入れの掃除という日常的なことに表われる「権力闘争」が，大きな問題をはらんでいる場合がある。家事の勧めに顔をしかめる妻たちが多い一方，教会にいつから出席するか，いつタバコをやめるか，いつ宣教師の話を聞くかといったことについては自由意志を尊重しなければならないと考える夫や妻たちもいる。強いるのをやめて，「私が正しい」式の態度から「一番良いと思うことはあなたが自分で選べばよい」という気持ちになった時，家族は霊的な恵みにもっと感じやすくなると思う。

ではそうなると，悔い改めを叫ぶ責任はどうなるのだろうか。神権者が家を治めなければならないということは知っている。また聖書には，イエス・キリストが教会の頭であるように夫は妻の頭であると言われている（エペソ5：23参照）。しかし末日の聖典には，神権者は権能を行使する方法によく注意を払うようにと書かれている。いかなるかたちであれ，強制はよくない（教義と聖約121：37—39参照）。教会の女性たちは，夫が良いことをするように励ますよう勧められている。聖典や教会歴史を読むと，女性には夫に助言を与え，励ます権利と責任のあることがわかる。しかし，ジョセフ・スミスはノーブー扶助協会の女性たちに，小言を慎むように忠告している。

「あなた方は，夫の行状を責めたててはならない。……あなた方の聖さと思いやりと愛情とを感じさせなさい。……争い，口論し，言い逆らい，反抗してはならない。柔和と愛と聖さ，これこそが，善良な男性たちの目にあなた方を大いならしめるものである。」（*Documentary History of the Church*「教会歴史記録」4：605）

教義と聖約121章には，聖霊はふさわしい神権者に，人々に対して神の権能をどのように用いたらよいかを教えて下さるという約束が記されている（教義と聖約121：43参照）。

そしてニーファイは，その特権が神権者だけのものではなく，聖霊は「およそ神を熱心に求める者たちに神が与えたもう賜である」（Ⅰニーファイ10：17）と語っている。この賜は何と貴いことだろう。特に，なかなか止められない習慣や強い偏見の持ち主にはとりわけ大切であると思う。

次に，家庭内の目標達成に関する第4の大切な原則を，私は先頃行なわれた長老見込み会員の集いで学んだ。その席上，2，3年前には「教会に関心を持つはずがない」と思われていたひとりの兄弟の証があった。その兄弟が立ち上がった時，私は奥さんのナンシーが御主人の思いやりのなさや教会に対して批判的であることをなげいていたのを思い出した。

私たちの前に立っている温厚で人好きのする兄弟からは，どう考えてもナンシーが言っていたような姿を想像することができなかった。彼は私たちに，数年前に夫婦の仲が「とても耐えがたい」状態であったことを話した。

「本当に良くない状態でした。けれども離婚しようとは思いませんでした。ふたりとも，離婚は子供たちにとって最悪のことだと承知していたからです。でも，別れないだけで，子供たちのためになることは何ひとつしていませんでした。ナンシーは，教会に入いれ，子供の模範になれと，あれこれいろんなことを言って私を悩ませました。そして最後には，ある距離を置いて，私を無視したようになってしまいました。彼女は時々小言を言いました。私は口実を作って夜遅くまで会社で働いたり，子供をどこかに連れて行ったりして家にいないようにしましたが，そんな時には彼女も内心ほっとしただろうと思います。

ところがどういうわけか，ある日突然ナンシーが変わったのです。急に私の世話をやき始めて，細かなことまで結婚当時のように心を配ってくれるのです。はじめは，またかとたかをくくっていました。以前にも，新聞で読んだか本で読んだかで気まぐれに始めることはありましたが，いつも長くは続かなかったからです。それがこの時ばかりはかなり真剣な様子でした。そしてひとつ驚いたことは，彼女が何も見返りを期待しなかったことです。」

状態が良い方向に向かい，ナンシーの態度によって彼が変わったことを彼自身の口から聞いて，私たちは感激した。彼はそれを「奇跡です」と語ったが，私も内心その言葉にうなずいた。

私はナンシーから彼女自身の変化について聞いていた。ある日，事の重大さに気づくと共に，自分がやけっぱちになっていたことを知った。霊的に最低の状態になっていたのである。そこで彼女は自分の問題を主に話そうと決心した。

彼女はこのように言った。「声を出して祈る方が良いって何かで読んだんです。それで私，何でもしたい気持ちでしたから，その日の午後，自分の部屋に鍵をかけて声を出して祈ったんです。あんなに熱心に，謙遜になって祈ったことはこれまでありませんでした。私たちの家庭が主に喜ばれるものでないことはわ

かっています。でも家庭を良くしたいという願いをわかって下さいって。天のお父様に，スタンがもっと思いやりを持ってくれて，福音が理解できるように助けて下さいとお願いしました。

み声を聞いたり，示現のようなものを見たりしたわけではありませんが，ただ，ひとつの考えが混乱していた頭にさっとひらめいたんです。初めは，気持ちが散っているからだと思って，集中力のないことを申し訳なく思いました。でも今は，それが自分の考えではなかったことを知っています。私が望んでいた答えとはまるで違っていましたが，それが私への答えに違いなかったと思います。力強くはっきりとした答えでした。『あなたが完全になった時に，彼のことを心配すればよいって』

実行するのは大変でしたが，良い妻になるために精一杯努力しなければいけないと思いました。少なくともやってみなければと思いました。それから何か月かして，聖餐会の時に2度目の啓示を受けました。ワード部にとても夫婦仲が良くて霊的で，前から素晴らしいと思ってうらやましかった御夫婦がいらっしゃいますが，何かの話でその御夫婦のことが頭に浮かんできました。その時，我を忘れる位にとても平安な気持ちを感じて，私にも自分の家庭を天国のような場所にする力があると思いました。

改宗者が福音に改宗する時に抱く熱い気持ちを感じて，主はスタンを見守り，助け，手を貸して下さる，スタンの仕事ぶりや隣人に対する親切を主は喜んでいらっしゃるって思いました。こうして私はやっとわかりました。その時よく理解できたのです。天のお父様が私の夫を深く愛しておられることを，私は彼を憎んでいたことをとても恥ずかしく感じました。」

正しい目標を持つ，人を受け入れ，尊敬する，権力争いをしない，聖きみたまの導きを受けられるように心を開く，簡単なことではないだろうか。以上私が述べてきたことは，救い主が述べられた次の一言に尽きる。「わたしがあなたがたを愛したように，あなたがたも互に愛し合いなさい。」（ヨハネ15：12）これを実行することは容易だろうか。残念ながら容易ではない。しかし，これほど大きな報いをもたらすものはめったにない。自分の手で結婚生活を築き上げようとする時，夫婦はお互いの益のためにすべての権利を放棄し，対等の関係を保つようにしなければならない。初めは寂しいであろうし，どんな時に妥協すべきで，どんな時に妥協してはいけないか，天父を頼るしかないことも多いに違いない。また伴侶の状態が好転するとは限らない。というのも，好転させることだけがあなたの目的ではないからである。ただ，律法には成就する道が備えられている。あらゆる方向から思いもよらない明るい結果がもたらされた時に，どうかびっくりしないでいただきい。

「あなたが代価を払えば」

リン・デル・マー

デビッドとネリーが結婚して，早4年たっていた。友人たちの家から30キロも離れてカナダ・ロッキー山脈の近くにぽつんとある農場の一軒家で，ふたりはとても仲が良く，幸せであった。しかし，ネリーは特にひとりでいる時に，ふっと寂しさを感じることがあった。何となく不平を言いたい気持ちであった。口には出さなかったが，正直な話，自分の現状に満足していないことをネリーは知っていた。

デビッドは教会員ではなかった。ネリーは彼を愛していたので，彼を必ず改宗できると信じて結婚したのであった。ところが，デビッドは結婚してから教会に対して次第に無関心になってきていた。宗教を話題にしようというネリーの努力と友人たちの助力が，かえってその話題を避けようという気持ちをデビッドに起こさせているようであった。そしてとうとうデビッドは，宗教のことを一切話さないでほしい，そうでなければ友達付き合いをやめると，友人たちに宣言したのである。

この頃，マーリン兄弟がデビッドとネリーの家のホームティーチャーに召された。訪問は片道30キロで，雪が積もった冬場には2日がかりだった。

初めての訪問がちょうど冬で，ふたりのホームティーチャーはデビッドに勧められて1泊した。ホームティーチャーが宗教のことを口にしない限り，デビッドは素晴らしいホストぶりを発揮した。そして彼はいつものようにこのホームティーチャーに，宗教の話題は遠慮して下さいと頼んだ。

ホームティーチャーたちはデビッドの気持ちに添って楽しい夜を過ごしたが，寝る時刻になった時に，マーリン兄弟から，一緒にひざまずいて祈りたいという話が出た。デビッドがそれを了承したので，みんなはひざまずいた。主の祝福がこの家にあるようにと願う祈りだった。

翌日，ホームティーチャーが帰る前に，デビッドは福音について2，3質問した。しかし，マーリン兄弟は，「あなたと友達でいたいので，宗教の話はしたくありません」と返事をした。そこでデビッドは，ホームティーチャーたちに，毎月訪問して下さいと頼んだ。

翌月も夫妻とホームティーチャーはとても楽しい夜を過ごした。けれどもこの時は初めと違って，夜中過ぎまで福音についての話がはずんだ。翌朝ホームティーチャーが帰り支度をしていると，ネリーがマーリン兄弟を部屋のすみに呼んで，「デビッドに福音の真理を理解して教会に入ってもらえるなら，何でもします」と言った。

そこでマーリン兄弟は彼女に言った。「ネリー，その言葉を忘れないで下さい。あなたが代価を払えば，望みはかなえられます。私はあなたにこのことをお約束します。それであなたは知恵の言葉を守っていらっしゃいますか。」

ネリーはうなだれて言った。「あのう，デビッドはこの教えを理解していません。彼，紅茶とコーヒーが大好きなのです。それで私もお付き合いして飲んでいます。知恵の言葉のことは前に話したことがあるんですけど。」

「そうですか。でも，言うことと行なうことが違っていたら，姉妹の言葉にどれほどの影響力があるでしょう。」

またひと月が過ぎ，ホームティーチャーの訪問を待ち受けていたネリーは開口一番こう言った。「とてもうれしいことがあるんです。デビッドが紅茶とコーヒーをやめました。私が飲まないのを見て，どうして紅茶やコーヒーを飲まないのかと聞くので，答えたんです。『私，これまであなたに対して誠実でなかっ

たわ。小さい時から知恵の言葉を教えられていたのに，それが守れないほど弱かったんだもの。口では大切だと言いながら自分からそれをしていなかったのは，悪い見本でしかないって気がついたの』って。そしたら次の朝，私が朝食の支度をしていると，デビッドが『ぼくにも，もう紅茶やコーヒーは入れなくていいよ』って言うんです。」

翌朝，マーリン兄弟は家を出る前に，「ネリー，お祈りはしていらっしゃいますか」と尋ねた。ネリーは一瞬口をつぐみ，それから「いいえ，していません。デビッドがお祈りを信じていませんので。それに，結婚してからまわりに大勢の友人がいて，お祈りのことはすっかり忘れていました」と答えた。

「でも，祈りを信じていると御主人に話しているんでしょう。」

「はい。」

「けれども，ただ信じているだけでは信仰とは言えません。信仰は行ないを伴うものです。姉妹は御自分の約束を覚えておいででしょう。お祈りをしていただけますか。」

「はい，します」とネリーは答えた。

「御主人に，一緒にひざまずいて祈りましょうと言って下さい。もし御主人が承諾しなくても，あなたが忠実に祈りを続けていれば，きっと一緒にして下さるようになりますよ。」

翌月はさらに進展があって，楽しい夜がふけると，デビッドの方から，「寝る前に祈りましょう」という誘いがあった。

帰る前に，マーリン兄弟はネリーに，「什分の一を納めていらっしゃいますか」と質問した。

「いいえ，御存知のようにデビッドは什分の一を信じておりませんし，彼が働いたお金なものですから。」

マーリン兄弟は言った。「でも，姉妹のお小遣いはあるでしょう。収入の什分の一を納めるようにとおっしゃっているのは主です。1ドルの什分の一の10セントは，主の目には1,000ドルの什分の一の100ドルと全く同じです。什分の一の律法を信じておいでなら，守らなければ。」

次の訪問の時に，ネリーは什分の一の3ドルを納めた。それは結婚して初めての什分の一であった。

その次の月，ホームティーチャーが訪問を終えて帰ろうとした時，デビッドが言った。「もしよければ，私も什分の一を納めたいんですが。」

「どういうわけで什分の一を納められるんですか。」

「この原則を忠実に守った者にどんなに祝福があるか，妻が教えてくれたものですから。」

マーリン兄弟は，目を見張るばかりのデビッドの変わりようにネリーをほめた。「しかし，もうひとつ，とても大切なことがあります。御一緒に聖餐会に出席することです。」

「それは難しいですわ。」ネリーは答えた。「主人は毎週日曜日に公園に行くのを楽しみにしているんです。」

「安息日を正しく守ることの必要性を御主人にわかっていただかなくてはね。あなたの気持ち次第だと思いますよ。毎週教会に出席したいということを話して，御主人を誘ってみて下さい。」

デビッドはネリーの頼みを聞き入れて，冬が近づく頃にはいつもふたりで聖餐会に来るようになった。その後間もなくして，デビッドはバプテスマを受けたいと申し出た。そして，アルバータ神殿で儀式が行なわれるようになった時，ふたりそろって訪問団の第一陣に加わり，エンダウメントと永遠の結び固めを受けたのであった。

「改宗するに至った一番の動機は何でしたか」と聞くと，デビッドはこう言った。「どんな時でも，耳で聴くより目で見る説教の方がいいですからね。」

母親の力

扶助協会中央管理会会長
バーバラ・B・スミス

息子のブレインが祝福師の祝福を受ける時，私たち親子3人は，祝福師から断食をして彼の家に来るようにと言われました。それと共に祝福師は，断食をして来ていただくのは主が用意しておられる祝福をすべて授かるようにするためです，との説明もありました。

私たちが祝福師の家に着くと，祝福師はすぐ息子に祝福を授けて下さいました。それは本当に素晴らしい経験でした。

私には祝福師がどのようなことを言われるか，前もってわかっていたように思います。主が私の知っておいた方がよい事柄を特別に私に教えて下さったのかも知れません。

やがてブレインは成長して，伝道に出る時が来ました。ところが，息子の関心は専らスポーツや学業などに向いていて，伝道に出るという考えは，息子の計画にありませんでした。

そのようなある日，息子は父親に，「お父さん，ぼく伝道に出なければならないの」と尋ねました。

主人は，少し考え，言葉も途切れがちに答えました。「いいや……ブレイン……伝道に出なければならないということはないよ。出るか出ないかは自分が決めることだ。伝道に行きたければ行きなさい。」

それを聞くと，息子は私のところにやって来て，「お父さんは行かなくてもいいと言ったから自分は伝道に出ない」と申しました。

そこで私は，祝福師の祝福を持ち出してこう言いました。「でもね，ブレイン。あなたの祝福文には何て書いてあるの。多くの人に福音を伝えるってあるでしょ。」

息子は黙って考え込んでいました。

その後，息子は，小児麻痺が原因で足が不自由になったひとりの友人にたまたま出会いました。その友人は伝道から帰ってきたばかりで，喜びに満たされ，はつらつとしていま

した。

「やあ，デビッド。君はなぜ伝道に行ったの。」

「そうだね。みんなと同じで，男性はすべて伝道に出るべきだというのが理由だよ。自分が主をどれだけ愛しているかを示すためにね。」

友人のこの言葉は，息子の心にあった様々な思いを一撃しました。祝福師の祝福を思い出した息子は，この時，伝道に出て主に仕える決意をしたのでした。

ともあれ，母親の私が息子の受ける祝福を早くから予知していたことは，息子に伝道に出る決心をさせる上で大きな助けとなりました。私は，シオンの母親であればだれでも，自分の子供に伝道活動に携わる特権と義務を引き受けさせるに当たって，このような霊的な助けを得る資格があると思います。

私は扶助協会中央管理会会長として，全世界の120万を数える扶助協会会員が果たして聖霊の導きをどれだけ受けて生活しているだろうかとよく考えます。今，主のみ業を力強く推し進めなければならないと，キンボール大管長は語っておられます。そのことを考えると教会員は，宣教師を自国の会員の中から送り出そうという認識を深く持つことが必要になってきます。

このことからも，母親である私たちは，子供を教えるという大切な仕事が自分に与えられていることを認識しなければなりません。そのような認識の上に立って子供を教育すれば，子供たちは主を愛し，主に仕えたいという望みを抱くようになることでしょう。

教会歴の長短を問わず，私たちは皆，私たちの心に大いなる証を記す聖霊の導きを受けることができます。聖霊の役割は真理を証することです。そしてこの証を心の中に刻まれた私たちは，奉仕にまい進し，それによって自分の技量を完全にし，その労力から最高の報いを刈り取ることができるのです。

私は世界をまわって，主のみ業に献身しておられる姉妹たちの働きをこの目で見てきました。その結果，主に仕えたいという希望をもった若い世代を育てることにすべての人が献身できるはずであるとの確信を得ました。何でも喜んで行なう気持ちのある息子や娘たちが天の力を受ける時，何ものも彼らを妨げることができません。ましてや，世界の各地で福音を宣べ伝える宣教師となる息子，娘たちを育てる場合はなおさらです。

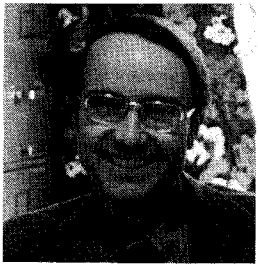
私は，新会員や新設ステーキ部の素晴らしい働きをたびたび見てきました。先だって新しく組織されたメキシコ・シティーのステーキ部で，会員の手工芸品を集めて見事な展示会が催されました。会場にはもちろん扶助協会の作品も展示されていました。

また，先の教会の総大会の折，私は，大会に出席するため遠路はるばる来られた多くの改宗者の方々とお話する機会がありました。福音を知ってどのように生活が変わりましたかという質問に，非常に率直に答えて下さいました。人生経験は様々に違っていても，回復された真理の光によって日々の生活に目的と指針ができたことを一様に大きな祝福として感じておられました。

福音は私たちに，家庭の中で互いに愛し合うように，また接する人々に愛を示すようにと教えています。愛をもって私たちの光を輝かす時，家族は大きな報いを得ます。愛にあふれた家庭という囲いの中で，子供たちは福音の原則を学びながら，主に仕えたい，知識を得たい，最高のものを得たいという望みを抱くようになることでしょう。

この目標に向かって努力する時，私たちは一人一人聖霊の導きを受けることができるのです。私は何度もそのような経験をしました。

質疑応答



マサチューセッツ州ケンブリッジ
インスティテュート指導主事

スティーブ・F・ギリランド

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり，教会の教義を公式に宣言するものではありません。

私たちは前世である霊と結婚の約束をしており，この世でその人を見いだして結婚するというのは本当でしょうか。

私の知る限りでは，この質問に対する答えはまだ与えられていません。けれども，これは末日聖徒がよく問う質問です。特に，前世の状態について考える時に，この疑問が起こってきます。そして，この質問を投げかける教会員が多いことから，教会の指導者も時時このことに対して見解を述べています。従って，これを理解するのに役立つと思われる見解を幾つか紹介したいと思います。

まず初めに，幾人かの予言者の記録にあるように，私たちの多くは，この世に来るに先立って，主と誓約を交わしています。例えば，ジョセフ・スミスは次のように述べています。「世の人々を教え導く召しを受けている人はすべて，前世の天上の大会議において，まさしくそのために聖任されたのである。私はかの大会議でまさしくこの職に聖任されたと思う。」（*History of the Church*「教会歴史」6：364。アルマ13：3—9をも参照）

このことがどれ程多くの人々について言えるか，私にはわかりません。けれども，前世で伴侶と約束を交わしていたと，祝福師の祝福で宣言される末日聖徒がいると聞いています。

しかしながら，これがすべての人に該当するかどうかとの問いに対して，大管長会は，1971年に次のような声明を出しています。「私たちが前世にいた時に，自分の両親と伴侶とを選ぶことができたか否かについては，全く啓示された言葉がありません。」（セミナリー・インスティテュート副委員長ジョー・J・クリステンセン兄弟に宛てた手紙，1971年6月14日付）

また，ジョセフ・フィールディング・スミス長老は，1931年に，次のように書いています。「ある場合には真実であると考えられるが，しかしあらゆる場合に，あるいはほとんどの場合にあてはまると考えるには，あまりにも想像力を必要とすることである。」（「完成への道」p. 31）

これらの具体例のひとつとして，ある教会員たちは，1857年のジョン・テイラー長老の記事を引用します。それは，前世で約束が交わされていたと感じたひとつの例について，テイラー長老が述べたものです。（*"The Mormon"*「モルモン」1857年8月29日参照）

しかし，この事柄については，「全く啓示された言葉がありません」というのが，教会幹部から与えられている回答です。また，教会の指導者は，聖典あるいは予言者によって明らかにされていない教義を教えないようにと，私たちに勧告しています。（ハロルド・B・リー長老，セミナリー・インスティテュート職員への説教，1966年7月8日，pp. 6—7）この助言は的確です。この事柄について個人的な啓示を受けたと感じている会員に対しても的確な助言だと思います。

すなわち，前世で約束を交わしたとしても，その約束よりも努力をして両者の関係を築くことの方が，はるかに価値があるのです。

女性のための記念碑

モアナ・ベネット

イリノイ州ノーブーで建設が進められてきた女性のための扶助協会記念碑が，スペンサー・W・キンボール大管長により，今月献堂されます。この記念碑を目にする人々は，人類に貢献する女性に賛美の気持ちを抱くことでしょう。女性の役割が問われ，様々に論じられている今日，人の考えによる混乱した哲理が横行する世の中にあって，イエス・キリストの福音は永遠に続く明らかな道を示しています。この記念碑は女性に課せられた様々な責任を描写しており，この記念碑から，福音の計画における女性の役割についての末日聖徒の考え方を知ることができます。これは女性のための記念碑としては最大規模のものです。

献納式は6月28日水曜日に行なわれ，その後3日間，ノーブーにおいて記念行事が催されます。この3日間は毎晩，教会の女性たちをたたえる劇が上演されることになっています。また，6月29日には扶助協会大会と証会が開かれます。

この記念碑は，女性をたたえるいくつもの彫像からできています。これらの彫像は，111m×73mの広さの美しい景観に恵まれた公園の中に立っています。なおこの公園はノーブーの訪問者センターの後ろにあります。公園の中央には，この選択の世に確信を持って自らの道を選んで前進しようとする女性像が設置されています。この女性は，あらゆる時代，およびあらゆる年代の女性を代表するものです。このほかにも，女性の知性の向上，慈善奉仕，霊性，あらゆる年代の人々との交流，家族の関係，永遠の生命，および永遠の伴侶を象徴する女性の像が立ち並んでいます。

今年の3月で，扶助協会は創立136年を迎えました。扶助協会中央管理会のバーバラ・B・スミス会長は，次のように言っています。「この大切な記念碑建設の地として，扶助協会発祥の地であるノーブーが選ばれました。予言者ジョセフ・スミスはこの地で妻のエマに女性のための鍵を託し，扶助協会を通して女性は知識と知恵を豊かに受け，助けを必要としているすべての人に恵みをもたらすことができる，と約束しました。」

最初18名で発足した扶助協会は，教会の発展と歩調を合わせて大きくなってきました。最初の1年間で約1,200人の会員となった扶助協会は，現在120万人以上の会員を数えるほどに発展しています。

この記念碑の建築に際しては，世界各国の姉妹たちの協力がありました。建設費を集めるために，一致結束して資金獲得に努力して下さいました。

スミス姉妹は次のように言っています。「主が私たちにこのような正に国際的な組織をお与え下さったのは偶然ではありません。主は私たちに，世界中の女性の生活に良い影響を及ぼすことのできるひとつの協会を備えて下さったのです。主は私たち女性に，連帯感を強め，強さを増し，永遠を見る目を養う手段を与えて下さいました。これによって私たち女性は，この世においても来るべき世においても各々の行く末を完うすることができるようになったのです。私たちは，扶助協会ノーブー記念碑が，個個の女性とその立派な生活に対する私たちの大いなる信頼を象徴するものとなるよう願っています。」

すべての答えは モルモン経の中に

日本福岡伝道部　福岡支部
浜田しずの
（元日本札幌伝道部専任宣教師）

隣の部屋の楽しげな声。しきりに私の名を呼ぶ姉の声。それでも聞こえない振りをしていた私でした。「ホームティーチャーです，よろしく」と，ふたりの教会員が，はずんだ調子で握手を求めてきても，目もくれず，ぷいと自分の部屋に入ってしまいました。「どうして教会の人はみんな，握手が好きなのかしらねえ。」母と私はよく話したものです。

私には，教会員である姉の行動がよく理解できませんでした。日曜日ごとに朝から教会に出かけていく姉，「せっかくの日曜日なのに……」私はもちろん，父や母もただ首をかしげるばかりでした。そして私は，すべて教会を中心にして行動する姉のことを腹立たしくさえ感じていたのです。

高校生の頃から幼稚園の先生にあこがれていた私は，短大卒業と同時に，希望に燃えて幼児教育の世界へ飛び込み，この職業こそ人生で最も素晴らしい，と夢中で過ごしました。そしていつのまにか5年が過ぎました。そうしたある日，私はふっと，これでいいのかしら，何か足らないのでは……と考え始めました。それが何であるかわからないまま，長年なじんだ幼稚園を辞め，家事見習いという名目で家にいました。けれども，すぐに暇を持て余すようになりました。そんな時，「裏磐梯に旅行しようよ」と姉から誘われたのです。教会の大会ということで多少抵抗は感じましたが，就職している時とは違って自由な時間が存分にあるということで，結局姉について行くことになりました。ちょうど4年前の7月のことです。

裏磐梯の宿泊地に着いた時，私は少なからず不満でした。「どうして私と姉を別々の部屋にするのかしら，だれも知った人はいないのに。」夕方になっても姉と一緒になれず，私はひとりきりで「家庭の夕べ」というプログラムに連れ出されました。ひとつの部屋に7～8人の教会員が集まり，自己紹介をし，ゲームを楽しむプログラムでした。

私が自己紹介した時，周りの人は質問しました。「姉妹の責任は?」「姉妹はいつバプテスマをお受けになりました？」私には何のことだかわかりません。「あの一，実は私，教会とは関係ないんです。」そう言った途端，みんなの態度が急に変わったように感じられました。みんなは，何をするにも，私にわかりやすいように，容易に解け込めるようにと気を遣ってくれたのです。私にはそのことがよくわかりました。こうして私は，いつの間にかみんなに親しみ，打ち解けました。姉以外の教会員と，こんなに親しく話したのは初めてでした。

「とてもいい人ばかり……みんな普通の人と変わらないわ。」「教会に行く人はどこか弱さのある人にきまっている」という私の先入観は次第に消えて行きました。2日間は楽しく過ぎ，最終日，証会が始まりました。証の「あ」の字も知らない私は，一体何が始まるのかと，会場の片隅にちょこんと腰掛けました。

やがて私の目の前に繰り広げられたあの光景を私は一生忘れることはないでしょう。自分と同年代の若人たちが流れる涙をぬぐおうともせず，目を輝やかせ，喜びにあふれて，こう語り出したのです。

「神様は実在の御方です。イエス・キリストは私たちの救い主です。私はよく知っています」と。

誇らしげに，涙を恥じともせず，多くの人々が胸をはって証をしました。私は何か不思議な気持ちになりました。そして私は心の奥底で，つぶやきまし

た。「これは一体何だろう。私もあのように感動する何かをつかみたい。私が知らないものをみんなは知っている。」

こうして大会は終わりました。姉は急用で一足先に帰っており，私は博多までひとりで帰ることになりました。大会でいただいた証集をむさぼるように読み，道々，教会のことや大会でのことを思い返していました。こうして博多駅に着く頃に，私はひとつの決心をしていました。「今度の日曜日に教会へ行ってみよう！」

それから約1ヵ月後，私は水と霊によって生まれかわりました。ただ純粋に何かを求めて……。神様を信じて……。

教会員になって半年もたたない頃，独身の成人だけがホールに集められ，地方部長から各自に1枚の白紙を渡されました。そして，地方部長からこのような話がありました。「私の質問に対する答えを書いて下さい。何の条件も考えずに，ただ『はい』か『いいえ』で答えて下さい。」「あなたは今，伝道に出たいと思いますか。」「出られるとしたらいつですか。」これが最初の質問でした。私は驚きました。だれにも話したことがありませんでしたが，私はバプテスマを受けた時から，宣教師になりたいと思っていたのです。でも「改宗して間もない私など，とても恥ずかしくて……」そんな気持ちをだれにも言わず胸にしまっていました。しかし道は備えられていたのです。私は「何の条件も考えずに」と言われた地方部長の言葉に励まされ，紙に大きく書きました。「伝道に出たいです。今すぐにでも……」主は私の願いを御存じでした。改宗して間もない私でしたが，宣教師として召され，札幌の地に降り立ちました。心は熱く燃えていました。「私は神様から召された……この教会は真実なんだ……」と，心の中で叫びながら……。

主のみ業に励む日々が始まりました。来る日も来る日も戸別訪問の連続でした。2週間程たったある日，一軒の家の戸をノックしました。中からひとりの男の人が出て来ました。ところが，その人は私たちを見るや否や「ちょっと待って！」と言い残して，二階へかけ上りました。そして間もなく，一冊の部厚い黒表紙の本を持って降りて来ました。その瞬間の私の胸の内を，おわかりいただけるでしょうか。彼はその書物を開くや，私に質問を始めました。彼はある宗派の信者だったようです。自分の教会の聖書を得意気に開き，話し始めました。思い出すだけでも限りがありません。彼は自分の知識をひけらかし，説明を求めてきました。

私はその場に立ちすくみ，驚き，うろたえるばかりでした。「違います。そうじゃありません……。」何か言わなくては，何かを。心はあせるばかりでした。聖典を開いて説明するように求められましたが，ただ胸が熱くなる一方で，言葉は何ひとつ出てきませんでした。彼は「実に人の誡命に聞き従い，神の権能と聖霊の賜とをしりぞけ……この上神の言葉は必要でない」（Ⅱニーファイ28：26，29）と言っていたのです。彼は「自分の学問があるから」（Ⅱニーファイ9：42）と誇っていました。でもその時の私はただ驚き，うろたえ，なす術を知りませんでした。やがて惨めな敗北感を抱いてその場を去りました。重い足を引きづりながら，沈んだ心でアパートにたどりつきました。

神様から召されているのに，「なぜ何も言えなかったのだろう。この教会は真実なのに，私は何も言えなかった。私はきっと間違って伝道に召されてしまったんだ……。」くやしいやら，情けないやらで，その夜，私は一晩中泣きながら祈り続けました。「お父様なぜですか，なぜ……。」

偉大な予言者ニーファイは，民のことを心配して涙で枕をぬらしたと記されています。けれども私は，自分の弱さをいやと言う程知らされ，嘆き悲しんで，涙で枕をぐしゃぐしゃにしてしまいました。本当に惨めでした。証さえも述べられなかったことを思うと，悲しくてなりませんでした。涙と祈りの繰り返しの中で，やがてひとつのことを固く決心しました。「もっともっと熱心に，真心から聖典を読み，研究し，理解しよう。強い証を得なくてはならない。そして，もう一度あの人にお会いして，必ず胸を張って真理と証を述べよう。」

私は主から慰めと導きと，それに勇気を与えられました。それからと言うもの限られた時間の中でいかに聖典をよく学び，レッスンプランを完全にマスターするか，これが最大の目標となりました。たくさんのアイディアが湧いてきました。早朝，ただひとりで眠い目をこすりながら少しでもたくさん読もうとしたり，真夜中に布団の中に懐中電燈を持ち込んだり（この方法ではあまり読めませんでしたが）自分で聖典の手引きを作ったり，そのほかにもいろいろなことをしました。

ある時求道者の姉妹に，私は胸を張って言ったことがあります。「姉妹，このモルモン経にはどんな問題に対する答でものっています。今，姉妹には解決したいと思っていることがありますか」その姉妹は

こう言いました「実は今ひとつ悩んでいることがあるんです。その答えもあるでしょうか。」私は心の中で祈りながら，「どうぞおっしゃって下さい」と答えました。「私は今，毎晩，睡眠薬を飲まなくては眠れないんです。いつも気持ち良く眠ったことがないんです。どうしたらよいでしょうか。」「姉妹，モルモン経にその答えがありますよ。」彼女にひとつの聖句を読んでもらいました。

「汝の要する一切の助けを神に祈り求めよ……眠っている間も主が見守りたもうよう夜寝る時には自分の身を主に任せて寝よ。そして朝起きる時には神に感謝する念を胸にみたせ……」(アルマ37：36—37)こうして彼女はその夜，寝る前に祈りました。

そして次の訪問の日，私は彼女から喜びの声をきくことができました。「すごいですね。確かにモルモン経には神のみ言葉が記されています。私はあの日以来，一度も睡眠薬を飲んでいません。神様は私のお祈りを聞いて下さいました。」

私たちは，もう何も言う必要はありませんでした。彼女は聖典が真理の書であり，神が祈りに答えたもうという証を得ていたのです。やがて彼女はバプテスマを受けました。私はその時，ひと言だけつけ加えました。「ネ！ モルモン経は本当に素晴らしい書物でしょう！」と。

それからも，私の伝道の日々は続きました。雪が降りしきる日に，私たちは，あるひとりの素晴らしい奥さんにお会いしました。彼女は真理を求め，他の宗教をよく学んでいらっしゃいました。私たちは訪問を続け，レッスンを進めました。

しかし彼女は，どうしても最後の強い証が得られないと苦しんでいました。私は心の中で主を呼び求めました。その時，ひとつの聖句が浮かんできました。そこで私たちは彼女と共にその聖句を読みました。

「ごらん，私は自分がこれまでに話したことはみな本当であると自分で知っていることを証する。どのようにしてそれが確であることを知っているかと問うならば，これは神の聖い『みたま』が私に示したもうたのである。私は自分がこれを知るために長い間断食をして祈った。そこで主なる神がその聖い『みたま』によってこれを私に示したもうた。……」(アルマ5：45—46)

私たちは，彼女が証を得ることができるように彼女と共に24時間の断食を始めました。そしてあくる日，断食をした私たち3人は一緒にひざまずいて祈りました。彼女は，「昨夜，とても苦しくなって，ベランダに出てひとりで祈りました。それでも何の証も得られないんです」と涙を流されました。この寒い冬空に，彼女は雪をかぶりながらベランダで祈っていたのです。私たちは思わず涙を流してしまいました。このように真理を求める人に，主が真理をお与えにならないはずはない。「姉妹，3人でひざまずいて祈りましょう。」こうして私たちは代わる代わる祈ることにしました。祈っている間私の心は高まり，熱く燃えてくるのが感じられました。ただひたすら「主よ，どうか彼女をお助け下さい」と必死に懇願している最中に，ひとつの聖句が思い出されました。「われ汝にそのことに就きて心安かれと告げしにあらずや。汝，神よりの証詞より大いなる証詞をいずこに得るや。」(教義と聖約6：23)

祈り終わった時，彼女は静かに口を開きました。「姉妹たち，私は今姉妹たちのお祈りを聞いている時，重苦しかった私の心と体がスーッと軽くなり，心が暖かくなるのを強く感じました。本当に心に満ちるものを感じます。」それを聞いて私は叫びました。「それは主のみたまによる証です。姉妹，どうぞこの聖句を読んで下さい。」こう言って先程心に浮かんだ聖句を読んでもらいました。その後，彼女も素晴らしい主の娘となられました。

様々な経験をしながら，また主の多くの偉大な奇跡を目の当りにしながら，一年半の伝道はやがて終わりに近づきました。そして再び札幌の地に転任しました。しかし，1年余り前に会ったあの方とお会いする機会はありませんでした。けれども私は今，確かに知っています。すべての答はモルモン経の中にあり，またレッスンプランの中から答えることができるということを。どのような疑問も，すべて解決の糸口は聖典の中にあります。

神様は確かに生きていらっしゃいます。主は常に私たちと共にいて下さいます。私は知っています。教義と聖約84章88節のみ言葉は真実です。何という喜びでしょう。私たちは，この地上で最も力あるみ名，イエス・キリストのみ名によって証する権威と特権を与えられているのです。

信仰の道は長くて細いものです。けれども私はパウロのように絶えず主に頼りつつ弱さを恥じず（IIコリント12：9，10）に歩み続けたいと心から願っています。すべての経験は私にとって喜びです。この喜びを永遠にもちつづけたいと思います。現在，母も教会へ導かれており，共に福音が学べることを心から感謝しています。すべてイエス・キリストのみ名によって証いたします。アーメン。

ひとつの新しいこと

アリス・ストラトン

わたしが天のお父さまを愛するようになったのは，コロブの牧場に住んでいたころのことでした。わたしがひざまずいて祈るとき，お母さんはいつもわたしを助けてくれました。天のお父さまが，暗やみの中でも見守っていてくださることを知って，あたたかい気もちになりました。わたしはテントの外で動くかげも，木の葉のざわめきもこわくありませんでした。テントの上に落ちる松の葉の音は，りすのかけ回る音のようでした。ときどき，松かさ

がテントの上をころがって，地面に落ちました。

お母さんは「おやすみ」と言うと，テントの中にわたしをのこし，家へ入って行きました。

また，牧場では，おねえさんはミルクのバケツをあらい，お父さんは小さなあかりの下で本を読んだものでした。

コロブはすばらしい所です。かくれんぼをした草原やたくさんの丘がありました。ときどき，お母さんはべんとうを持って，わたしたちをハイキングにつれて行ってくれました。また，おねえさんとふたりきりで，せいざいしょのある谷へおりて行ったこともあります。これは，すばらしいぼうけんでした。

青いカケスが，木から木へととびまわり，さえずっていました。ものめずらしそうに見ていたマーモットは，わたしたちがそばに近づくと，穴の中へかけ込んで行きました。つりがねすいせんやむらさき色のひなぎくが，たくさんさいていました。わたしたちは，かわった形の小石をひろい，草花を夢中で集めました。

西の森に日のしずむころ，わたしたちはぼうけんを終えて，家に帰りました。

わたしたちは，お母さんに見せるため大切な宝をいっぱい持っていました。家には，夕食のとうもろこしパンのにおいがただよっていました。ところが家には誰もいません。お母さんはいないのです。わたしは外に出ました。そしてテントにかけて行き，中をのぞきこみました。すると，お母さんはベッドのそばにひざまずいていました。

「何してたの？」お母さんが顔を上げると，すぐに，わたしはたずねました。「お母さんは，あなたたちがぶじに帰って来るようにって，天のお父さまにお願いしてたのよ。」

わたしは，明るいうちに天のお父さまにお願いごとができるとは知りませんでした。わたしは家族の祈りのほかに，夜ねる前にだけ祈っていたからです。

お母さんは言いました。「パスティ，わたしたちはみんな天のお父さまの子供なのよ。天のお父さまはわたしたちを愛してくださっているので，いつもわたしたちのお祈りを聞いてくださるのよ。」

日がしずみかけたころ，わたしはひとつの新しいことを知りました。天のお父さまは，私たちのお父さまです。わたしたちは，いつでも天のお父さまとお話ができるのです。

わたしの心は，よろこびでいっぱいになりました。そのとき，やさしい風が通りすぎました。松の木の上では小とりがさえずっています。

かぞくは なんにん でしょう？

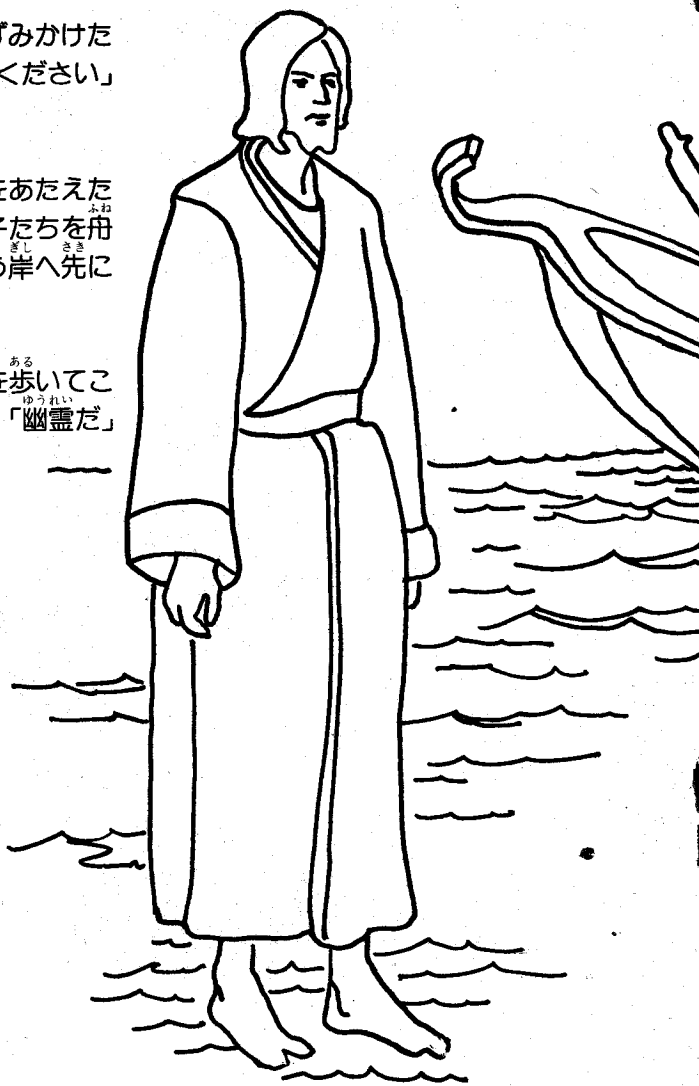
おとうさんとおかあさんは，
どこにいますか。
おとこのこと，おんなのこは，なんにんいますか。

ジュン・アンネ・オルセン

イエスと弟子たち

セルマ・デ・ヨング

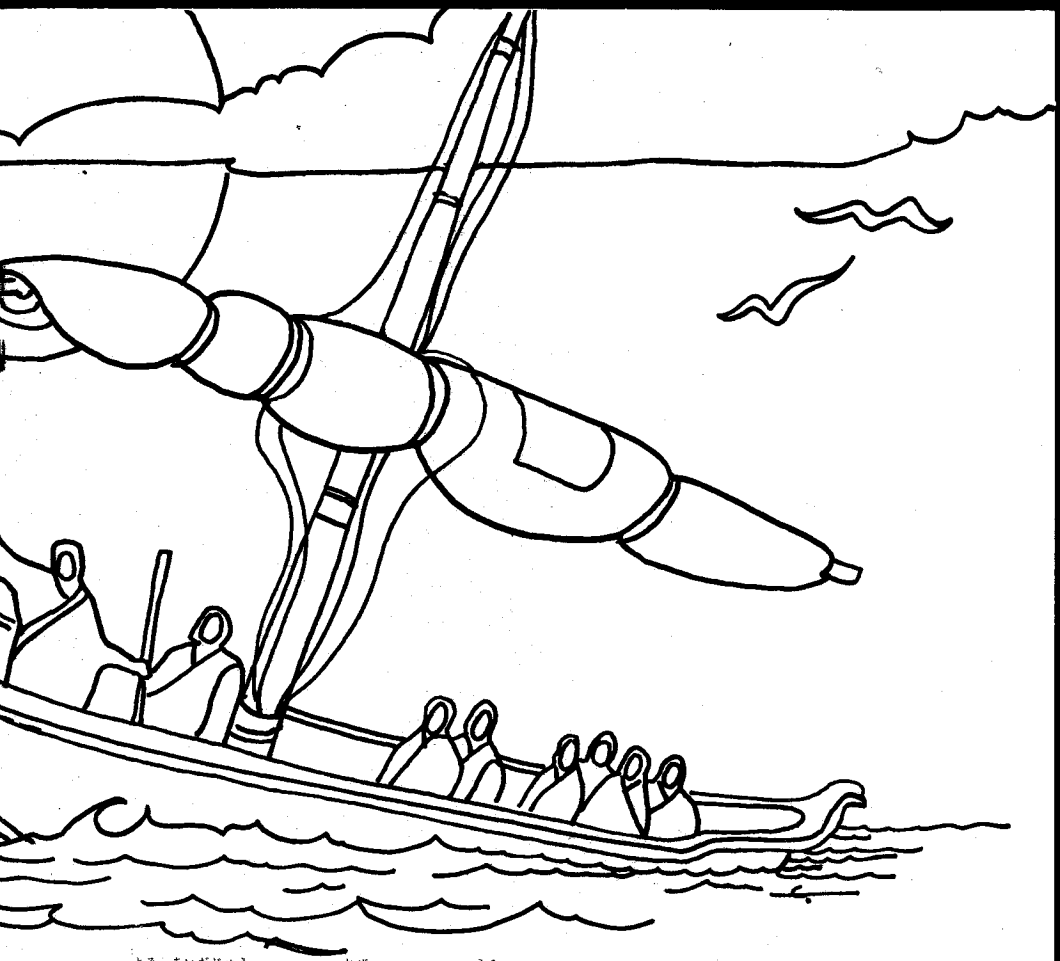
これは聖書に書かれているイエスと弟子たちの話ですが，順番通りではありません。はじめにマタイ14：13—33に書かれている物語を読んで，正しい順番にならべかえるため，番号をつけてください。むずかしければ，おとうさんかおかあさんに助けてもらいましょう。



＿ペテロは水の中にしずみかけたとき，「主よ，お助けください」と言いました。

＿5千人の人々に食物をあたえたあと，イエスは，弟子たちを舟にのりこませ，向こう岸へ先におやりになりました。

＿弟子たちは，水の上を歩いてこられるイエスを見て，「幽霊だ」とさけびました。



夜の間中，つよい風がふき，海はたいへんあれていました。

イエスは彼らに声をかけて，「しっかりするのだ，わたしである。恐れることはない」と言われました。

朝早く，イエスは海の上を歩いて弟子たちのところへ行かれました。

ペテロが答えて言いました。「主よ，あなたでしたか。では，わたしに命じて，水の上を渡ってみもとに行かせてください。」

イエスはすぐに手を伸ばし，ペテロをつかまえて言われました。「信仰の薄い者よ，なぜ疑ったのか。」

もうひとつの勇気

マウリーン・エプスタイン

ニュージーランドの農場でのことです。

ロイス・ベネットは，一生けんめいに，納屋の屋根によじのぼろうとしました。下から，いとこのイアン・ダビストックが大声で叫びました。「早くの

ぼるんだよ。止まっちゃだめだ。」

タビストック農場に遊びにくると，イアンはきまって大将になるのです。

夏の午後のこと，ロイスと，イアンと，アリステアー・タビストックの3人は，きもだめしをしました。

アリステアーは，あぶなく屋根から落ちそうになり，足をすりむいてしまいました。ところが，イアンが「おくびょう者」と叫ぶので，アリステアーは必死にのぼりました。

ロイスとアリステアーは同じ年です。「アリステアーにできることなら，わたしだってできるはずだわ。」ロイスは，おそろしさをこらえて，勇気をふるいました。そして，屋根のはしにしがみつくと，左足を前に出しました。そのとき，つきさすようなはげしい痛みを，足のうらに感じました。「アッ！」ロイスは思わずつぶやきました。

それでもロイスは屋根にのぼりました。それから，しだれ柳の枝にぶらさがって，地面にとび降りました。

イアンは，しぶしぶロイスの勇気を認めました。そして言いました。「今度は，こっちからのぼろう……」

けれどもロイスは，男の子たちのこの遊びがいやになりました。野菜畑のはしでは，妹のローレインが，タビストック家の子供たちとトンネル掘りをしています。でも，ロイスには，興味がわきませんでした。そこで，オレンジ畑のほこりっぽい道を，ひとりでぶらぶら歩いて行きました。緑の木にはおいしそうなオレンジがなっていました。左手のスグリの木の向こうに，野菜畑が広がっています。

道のつき当たりには，白い屋根の家がたっていました。そして，庭にはピンクのバラが咲いていました。その家の向こうには，高いかき根で囲まれた三角形の空地がありました。ロイスは木戸に手をかけました。農場でもよその家の庭でもない空地です。ロイスは探検してみようと思い，木戸によじ登りました。

その空地の中央は草がしげっていて，静かでした。迷いながらも，ロイスはもっとじっくりとあたりを見て行くことにしました。空地の向こうには，小山がありました。「とりでかしら？ マオリ人のとりでなんだわ。」ロイスはこう思いました。

その小山は，昔につくられたものでした。あたりは静かで，葉のサラサラという音や，近くの海の波の音が聞こ

えます。そのとき，急に，「とんでもない所に来てしまった」という気持ちがしました。

「ここはマオリ人にとって神聖な所なんだわ。ここを出なくちゃ。」ロイスは急いで門をこえて，外へ出ました。

「どこへ行ってたの？」イアンがたずねました。

「散歩してきたの。」

「おそろしくて逃げたんだろう？」

「屋根にのぼるのなんて，つまらないもの。」ロイスは，肩をすくめて言いました。

「おそろしいから，そんなこと言うんだろう？　そうだよな，アリステアー。」イアンはアリステアーの方を向いて言いました。

アリステアーは大きくうなずきました。

「でも，さっき屋根にのぼったでしょう。」ロイスは負けずに言い返しました。

「それじゃあ，もっとむずかしいことをしてもらうぜ。もしできなければ，もう遊んでやらないからな。」イアンは言いました。

「女の子なんかと遊びたくないからな。」アリステアーも言いました。

ロイスはじっとがまんしました。ここで腹を立てたら，だれも遊び相手がいなくなることを知っていたからです。

「それじゃあ，マリオ人の昔の墓場へ行ってきたら仲間に入れてやろう。」イアンは大声で言いました。

アリステアーは，にやりと笑いました。「さあ，墓場に行って，30分間そこにいるんだ。ものすごくこわい所だぞ。」

「いやだわ。」ロイスはきっぱりと断わりました。

「わーい，おくびょう者！」

ロイスは，もうそこへ行ってきたことを話そうとはしませんでした。とても大切な経験だったからです。そのとき，勇気がわいてきました。そして，イアンの言いなりになるのはやめようと思いました。ロイスは，もうひとつの勇気を発見したのです。

「どうしていかないんだ。」イアンはばかにしたように言いました。

「わたし，もっとすばらしいことに気がついたの。」ロイスはイアンの顔をじっと見ながら答えました。そしてひとりで帰って行きました。

世界記録会議，1980年に開催予定

来る1980年8月12—15日，ソルトレーク・シティーにおいて，ユタ州系図協会の主催により世界記録会議が開催される予定である。スペンサー・W・キンボール大管長は，去る3月20日，教会本部ビル講堂での記者会見でこの発表を行なうと共に，次のように語った。

「近年，系図を調べ，自分の先祖を知ろうという関心がとみに高まっています。そこで私たちはこの関心をさらに促すために，1980年の8月に，世界記録会議を開催したいと思います。

1980年は教会が設立されて150年目に当たり，この会議を開くのにふさわしいかと思います。」

この会議では，「私たちの受け継ぎを守る」をテーマとして，個人と家族の歴史を集め，それを編さんすることの大切さが強調される。

記者会見の席上，世界記録会議のシンボルとして，6人家族の大きな彫刻が紹介された。

昨年，先祖の探求と家族史でセンセーションを巻き起こした「ルーツ」の著者，アレックス・ヘイリー氏をはじめ，国際的に名の知られた権威者たちを講師として招く予定である。そして，1万人のアマチュアとプロの系図家，そのほか記録保管人，歴史家，司書，人類学者等を対象に，約200の講座を開く予定になっている。

キンボール大管長は，1969年にソルトレーク・シティーで開かれた第一回世界系図記録会議の成果と共に，全世界的に系図に対する関心が高まり，再び世界会議を開催するに至った次第を語った。また，大管長は，幾人かの親族が書いたアメリカにおけるキンボール家の歴史を読んだ時の喜びと，12代前の先祖が住んでいた英国のある町を1950年に訪れた時の喜びについて語った。

「今日，家族史を作成しようという気運が世界的に高まっています。従って，私たちはこの業をさらに進めたいと思います。また私たちが願うのは，第2回世界記録会議によって個人の歴史と家族史に対する人々の関心が高まるようにということです。すべての人々が，大切な記録を保存することの必要性に目覚めて下さればと思います。」

この記者会見後，キンボール大管長と副管長たちはそろって，予言者の祖父ヒーバー・C・キンボールの遺品の幾つかを見た。そのひとつに，古い望遠鏡があった。

現在，ユタ州やその他で，「私たちの受け継ぎを守る」運動が実施されており，個人の歴史と家族史の保存方法と交換方法が指導されている。また，ソルトレーク・シティー在住のキャロライン・オスラー女史が現在，家族史のひとつである工芸品等，物品の保管方法を一書にまとめている。子供の描いた絵をデザインにして枕カバーに刺しゅうしたり，レース編みやガラスの皿のように損じやすい物は食器棚の奥の方にしまっておくなどの保存法が紹介される。

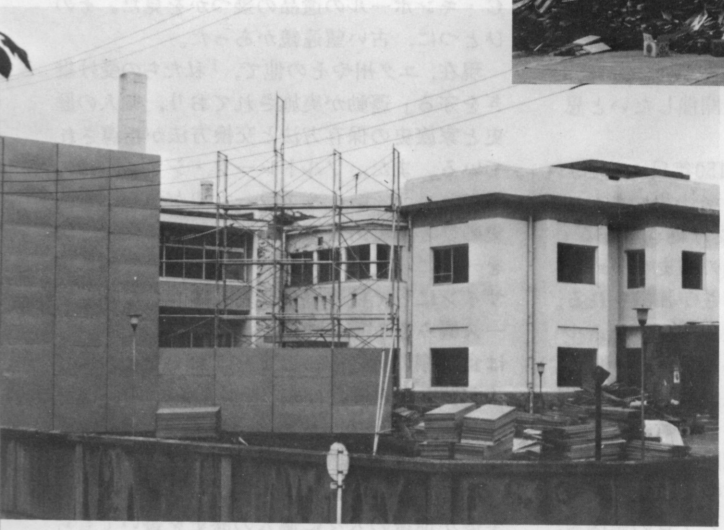
ソルトレーク・シティーのイーストウッド小学校は今年，教頭のラリー・フォネスベック氏の指導の下に，4年生から6年生までの生徒が地域の人々に個人の歴史を書いてもらい，それを学校に保存するプログラムを実施した。そこで生徒たちは，スコット・M・マセソン知事や元ユタ州教育委員長のT・H・ベル氏，ユタ州教育委員会のリラ・ジョークルンド氏その他に会い，個人の歴史の編さんを依頼した。

記者会見では，教育系図部の実務部長を務める，七十人第一定員会のセオドア・M・バートン長老が，報道関係者の質問に答えた。

「私たちにとって，実に喜ばしい発表です。」バートン長老は1969年の世界系図記録会議を回想しながら語った。「会議に出席した人々がアメリカを知るようになったことは，私たちにとって大きな喜びでした。そしてその会議に出席した人々から，次回はいつですかと尋ねられたものです。」

東京神殿の建設始まる

待望の神殿建設が，4月5日着工，1980年6月4日完成を目標に，鹿島建設(株)によって始まりました。今後，「聖徒の道」の誌面を通して，建築の進行状況を随時，御紹介したいと思います。



神殿建設工事のため，取り壊し中の日本東京伝道本部の建物。
（4月24日撮影）

公　　告

会員その他利害関係人各位

規則第18条の定める手続を経て，下記の通り教会用地を買収しましたので宗教法人第22条の規定によって公告します。

昭和53年4月18日
宗教法人「末日聖徒イエス・キリスト教会」
代表役員　アドニー・ワイ・小松

ワード部／支部	所　在　地	面　積
池田ワード部	兵庫県川西市花屋敷1丁目1,233	1,400.32㎡
船　橋　支　部	千葉県船橋市前原東5丁目21の6	910.21㎡

独身時代の祝福

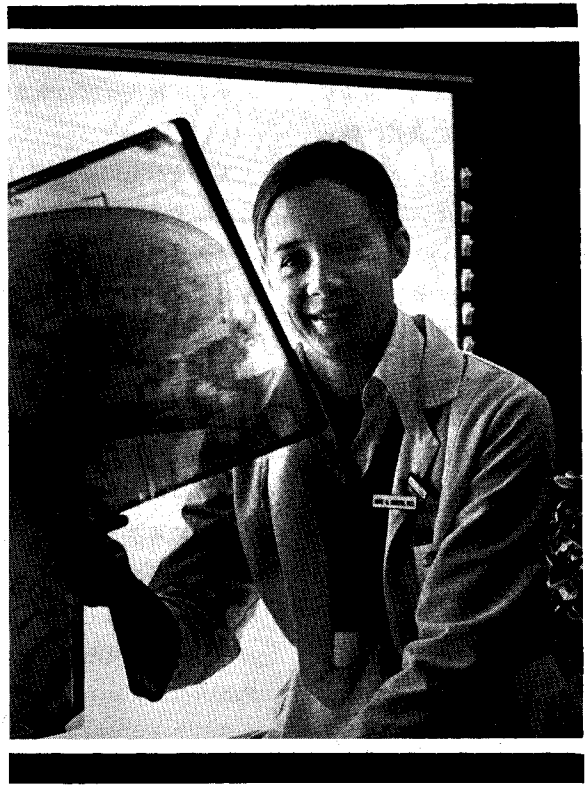
アン・G・オズボーン

独身の教会員には，独身者しか得られない祝福と特別な機会が数々与えられています。しかし，そのことがあまり意識されていないのが実情のようです。

また，結婚の願望が先に立って結婚はもとより，永遠の昇栄に対しても自分自身を備える多くの素晴らしい機会をおろそかにしてはいないでしょうか。

私は33歳になる改宗者で，まだ独身です。これまでしばしば，いつになったら自分の祝福師の祝福に約束されている神殿結婚ができるかと，一種のあせりを感じてきました。でも，バプテスマを受けて8年経ったこの頃，ようやく，忠実な独身会員には特別な祝福が与えられているということに気付き始め，そのことに感謝できるようになりました。

私たちには多くの時間が与えられています。しかもその時間を自分の思いのままに使うことができるのです。これは私たちに与えられた特権です。と同時に，私たちは金銭で買う



ことのできないこの時間という賜の使い方について責任を負わなければなりません。教会の独身会員として，私たちは独身であることをなげき悲しみ，失意の毎日を送ることもできれば，逆にこの生涯の一時期を活気に満ちた創造的な日々とすることもできます。私たちがこの時期をどのように過ごすかは，現在と究極の幸福だけでなく，永遠の進歩をめざす上でも非常に重要であると確信しています。

初めに，職業の問題について考えてみましょう。これまでもたびたび次のような質問を耳にしてきました。「末日聖徒の独身女性は，お金をかけてでも多方面に及ぶ教育を受けて，多くの時間を要求される職業に就くようにした方がよいのでしょうか」と。それに対して私は一概にこうだとは決められないと答えてきました。けれども，専門的職業に就いて大きな喜びを見いだしている人も現実には大勢います。そういう私も，医学部の教授，臨床専門医として人々に奉仕することに大きな満足感を覚えている者のひとりです。特に判別しにくい臨床診断を掘り下げていく時の喜びは格別です。また，祈りと神権の祝福を通して，私が今行なっているこの仕事が主の目から見て喜ばしいものであるという個人的な確信と慰めも得ています。

しかし，このように多くの時間と労力を費やして仕事をしても，教会のほとんどの女性はそれだけで満足はしないことでしょう。自分の経験を振り返って見てもそのことが言えます。これまでに得た決して忘れられない大きな喜びは，私が携わっている特別な仕事によってではなく，ひそかに行なった慈善の奉仕活動から得たものだからです。

私たち独身者には，どのようにすれば人々の生活に祝福をもたらすことができるかを学ぶ時間が与えられています。ところが，自分自身の問題や要求にとらわれて，周囲の人々の悲しみや悩みに全く耳を貸そうとしていないのが現状です。監督や扶助協会会長に尋ねれば，ワード部の中で温かい食事を必要としている人はだれか，芝生の手入れを必要としている家庭はどこか，あるいは親しい友達を必要としている人はだれかを知ることができます。温かいパンや焼きたてのパンを戸口で見つけた時に，病気等で外出できない人々はどれほど驚き，喜ぶことでしょう。

独身時代ほど自由な時間はないと思います。私たちはインスティテュートや家庭学習コースを受けることができます。また，聖典の学習計画を立て，それを熱心に進めることもできます。こうして培われた自己訓練の習慣は，必ずその後の生活に大きな影響を及ぼすはずです。

またその気になれば，数多くの良書を読むことができます。

さらに，様々な才能を磨き，趣味を多くすることもできます。この仕事を始めるようになった最初の頃，私の収入はそれ程多くありませんでした。そこで，私は，クリスマスの贈り物を全部自分で作ろうと決心しました。そして,よいアイディアがないかと，ろうけつ染めの本を買いました。すると意外なことに，この私にも芸術の才能があったのです。私は両親へ自分で染めて作ったものを額に入れて贈ることにしました。すると，その額縁を作って下さった画廊の主人は，私のろうけつ染めが大変気にいって，個展を開いてはどうかと言って下さいました。そして個展は大成功を収め，作品を売って得たお金は家賃の支払

いに当て，また，家を購入するための貯金に回すことができました。

私たちはまた，長い間延び延びにしてきた系図の作業を始めることができます。私は弟と一緒にまず資料の収集に取り掛かりました。そしてこれまで経験したことのない全く新しい喜びを知ったのでした。今では，家族をあげて古い写真を集め，記録をたどり，家族の系図表を作成しています。

教会の責任を熱心に果たすことによって得られる大きな喜びも見逃せません。私は日曜学校中央管理会の会員ですが，ワード部の日曜学校でも教師として奉仕し，大きな喜びを得ています。

また，健康を維持するために運動する時間もあります。私はスキーに行きますし，週の内の3日はテニスをします。また，愛犬を連れてランニングにも出かけます。このような日々の運動から得られるそう快な気分は肉体を活気づけると同時に，霊を高揚させてくれます。

ワード部や支部の家族と交流し，小さな子供たちと友達になることができます。私は野球の試合や水泳大会，ピアノやバイオリンのリサイタル，クリスマス演劇祭などにもよく招待されます。（いや，むしろ私の方から積極的に出かけて行くと言った方がよいかもしれません。）そして私たちが示す模範の力によって，若人が福音の原則に従って立派な大人になるよう励ますこともできるのです。

また，だれにも邪魔されることなく，ひとりで静かに天父と語り合うことができます。私は断食と祈り，それも長い時間をかけて天父と語り合うことの大切さをよく知っています。イノス書を読み，長い時間かけて主に祈ろうと決心してから，私の生活は急に変わりました。そして，驚くばかりの祝福を得ました。当面の生活や将来の生活に対する個人的な導きだけでなく，私が幸福になれるように主が特別な愛と関心を注いで下さっているという揺るぎない証をも得たのです。

それでも孤独感や失望感をどうしても打ち消せない時があります。そのような時は，どうすればよいのでしょうか。今月の初め，私は珍しく気がめいってしまいました。そして，耐えがたい孤独感に襲われました。近所には親しい友達が住んでいます。そこでいつものように，私は彼らの友情にすがりました。このような隣人や友人の愛に満ちた思いやりに励まされ，私はその時，ひとつの大切な教訓を学んだのでした。「必要な時に，私たちを励まし，力づけ，助けてくれる人々の愛の手が身近にある」と。もう一度周囲を見回して下さい。きっとやさしい愛の手がそこにあります。

失意のどん底にある時，もう一度周囲を見回して下さい。落胆は，サタンが用いる最も狡猾（こうかつ）で悪らつな手段です。サタンは，私たちに尊敬や愛情を受ける値うちのない者であるという思いを植え付け，私たちを自己卑下の淵に引きずり込んでしまうのです。このような落胆から逃れる最も確実な方法は，自分を必要としているだれかがいるという自覚を持つことです。ほかのだれかに祝福をもたらそうとする時に，自分の問題や悩みはすぐに解消してしまいます。つまり自分もほかの人の生活を明るくし，主の喜ばれることを行なっているという確信からくる温かい光の下で，それらはたちまち解消してしまうのです。

この貴重な宝である時間を有効に使い，この特別な賜を主に感謝しようではありませんか。まず自分から興味を持って行なわなければ，本当の興味は湧いてきません。私たちには，今それを行なう時間が与えられているのです。

伝道する大管長の

姿を見て

ジェームズ・O・メイソン博士

地域大会が始まった当初は，マンチェスター，メキシコ・シティー，ミュンヘンというように，大会は一度に1ヵ所でしか開かれなかった。当時の地域大会のスケジュールは，教会幹部にとって比較的楽であった。しかし地域大会をより大勢の教会員にということで，特にスペンサー・W・キンボール大管長の指導により，大会が5，6ヵ所で引き続いて行なわれるようになってから，旅行スケジュールは過密で厳しいものになった。

1975年にアジアでの地域大会の計画が発表になった時，私は少々不安を持ち，教会幹部夫妻，その他の一行には医師の同行が必要だと感じた。一緒に旅行する人数はごく少数であったが，必要とあらば手当てが施せるようにしておくことが大切だと思った。そこで，地域大会にひとりの医師が随行する必要があるとの提案をし，それが認められた。そして私にその責任が与えられ，1976年に欧州へ随行したしだいである。

私は，出発当初から，同行者に対してキンボール大管長御夫妻が示される細やかな心遣いに感動した。私たち夫妻がソルトレーク・シティーで飛行機に搭乗すると，ちょうど座席がキンボール大管長の後ろであった。離陸して数分後にシートベルト着用のランプが消えると，キンボール大管長は後ろを振り返って，私たちに「気分は悪くないですか」と尋ねて下さった。大管長や同行の人々の世話をするためにいる私たちに，そのような心配りをして下さったのである。その旅行の間中，親切で親しみやすい，しかも偉大な予言者は，常に周囲の人々を気遣っておられた。目下を問わず丁重な大管長の温かさが，旅をひときわ快適にしていた。

パリでの地域大会を終えた私たちは，次にフィンランドのヘルシンキへ飛んだ。キンボール大管長はすでに3日間の強行スケジュールをこなしていた。毎日早朝に起き，一日中びっしり詰まったスケジュールを消化し，夜は遅く床に就く。大管長は他のだれよりも忙しかった。

大会では管理と司会のほか，通訳を介して長時間話をし，神経の疲れる記者会見に臨み，大勢の地域の教会指導者を面接し，任命した。その夜遅く，飛行機でヘルシンキに向かい，途中，コペンハーゲンで乗換えがあった。そのコペンハーゲンの空港の廊下を歩いていた時のことである。キンボール大管長が服の入った旅行かばんをさげていた。私は手ぶらだったので，近づいて行って，「キンボール大管長，かばんをお持ちしましょう」と言うと，大管長は振り向いて，「ありがとう。でも大丈夫です。手持ちぶさたになりますから」

と言われた。自分の荷物は自分で持ちたいという気持ちが大管長の顔の表情にうかがえた。だれにも自分のことで負担をかけたくないという大管長の態度に，私は旅行全体を通じてさわやかに胸を打たれた。

最後の開催地であるドイツのドルトムントでは，歴史の古い美しいホテルに滞在した。ホテルのマネージャーは，すらりと背の高いいかめしい顔立ちの銀髪のプロシア紳士であった。軍隊の将校にでもなれそうな風貌であった。ホテルに到着した翌日，このマネージャーがキンボール大管長を評してこう言った。「あの方がこのロビーを通るたびに，私は圧倒されるようなものを感じるんです。」彼はキンボール大管長から放たれるみたまを感じたのであった。その後間もなく，彼は予言者に紹介され，短い語らいのあとでキンボール大管長から家庭の夕べの本をプレゼントされた。それから彼は宣教師のレッスンを受けることになった。

ホテルのマネージャーは，ごく短時間の出会いながら，生ける予言者から強烈な影響を受けたのである。ホテルを出発する日，私たちがホテルの正面からバスに乗り込み，一方通行のために1丁ほど行って向きを変え，また引き返してホテルの前を通ると，この端正で上品な紳士が歩道に立って，白いハンカチを振りながらキンボール大管長に別れの挨拶をしていた。ホテルのマネージャーが，ロビーを歩いている予言者の姿を見ただけで主のみたまを感じたというのは，大切なことである。ごらんの通り，キンボール大管長の外見は私たちと何ら変わりがない。その外見から，何ひとつ特別なところはないと考えるかもしれない。しかし，大管長の内なる霊は特別である。

ドルトムントの大会後，一行の大半がアメリカに帰国した中で，キンボール大管長夫妻とタナー副管長夫妻，そのほか数名はスイスのベルンに向かった。そして，大管長と副管長はスイス神殿でさらに丸1日半多忙な時間を過ごした。それまで14日間に，5ヵ所で開かれた大会に出席した上にである。その後，一行はベルンからバスでチューリッヒに向かい，そこから飛行機でニューヨークへ行き，そこでさらに別の飛行機に乗り継いでソルトレーク・シティーへ帰ることになっていた。その間，ふたりは休むひまもなかった。この時にも，私はキンボール大管長の並はずれた意欲と実行力を見たのである。

それまで14日間働きづめで，しかもこの先30時間，ベッドに入ることも，体を横たえることもできないのである。バスの中ではほとんどの人がシートにもたれてうたたねを始め

ていた。私はキンボール大管長の後ろの座席にすわっていて，1時間でも体を休めてほしいと思った。ところが，高速道路にまだ入らないうちに，キンボール大管長は席を立って，運転席の隣の折りたたみ座席に席を移した。私がぐったり疲れて座席に身を沈めていた間に，だれよりも疲れているはずの予言者が，まだイエス・キリストの福音を知らない人がバスの中にひとりいるということで，休もうとしないのである。

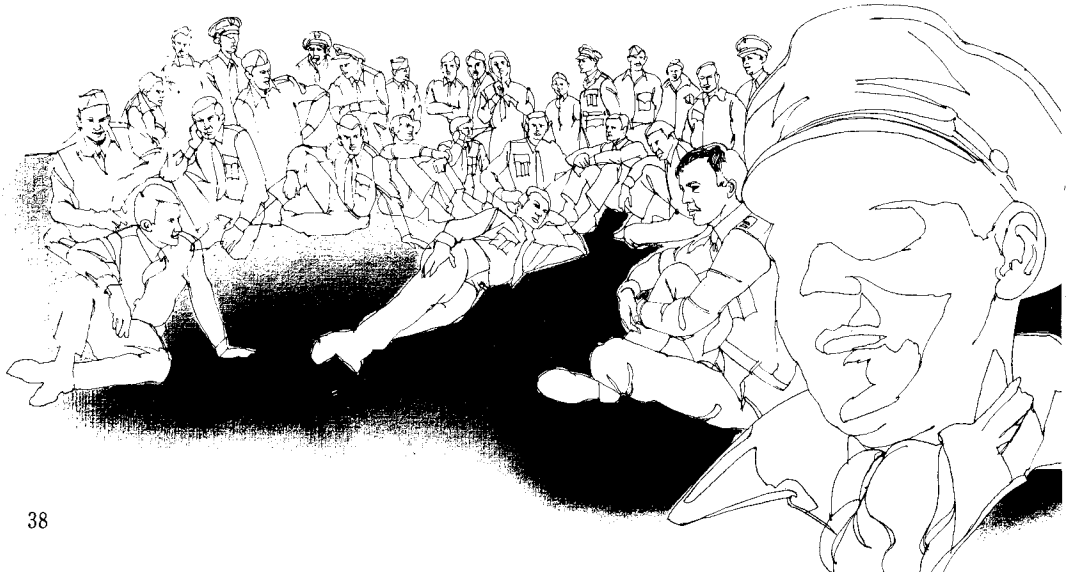
シートの背にもたれながらその様子を見ていた私は，何か後ろめたさを感じた。伝道がこの上なく大切であることをよく知っていた予言者は，人々に福音を伝えたいという燃えるような願いから疲労を押して行動されたのである。

英語をほとんど話せない運転手に大管長はどのように話をされるのかと，私は気をもんでいた。キンボール大管長はドイツ語を話せなかった。そのため，初めの内は，お互いに意志が通じないようであった。ところが，数分もたつと，お互いの話がよく理解できるようになってきた。そこで今度は，言葉が通じるかどうかの心配より，運転手がひんぱんにキンボール大管長の方を見るので，バスの運転の方が心配になってきた。運転手がキンボール大管長の誠実な話を理解し，関心を持ったことは，はた目からもよくわかった。ふたりの会話はバスがチューリッヒ郊外に着くまで続き，キンボール大管長はようやく座席に戻った。

バスがチューリッヒ空港に到着すると，スイス・チューリッヒ伝道部のゲリー・E・オブライエン伝道部長が出迎えにきていた。キンボール大管長はバスの扉が開くのを待ってオブライエン伝道部長を中に呼び入れ，握手をしながら，「オブライエン伝道部長，この方は_____さんです。この方に是非とも福音を教えていただきたいんですが」と言った。オブライエン伝道部長が「はい，大管長」と答えると，キンボール大管長は「_____さん，この人は教会の伝道部長です。彼からイエス・キリストの福音を教わっていただけますか」と言った。すると運転手はうなずいて，聞きますと返事をした。

私はこの経験から，福音を伝えることの大切さをあらためて教えられた。予言者は天父と親しく交流し，私よりもはるかにはっきりと幕のかなたを見ている方である。その予言者がこれほどまでに伝道の必要性を感じておられる。仕事に疲れきっており，伝道の機会をひとつ見逃して座席で休んだところで非難されるべきことはないと思われるのに，キンボール大管長ははつらつとして伝道を続けられたのである。私たちは自分の家族や隣人，友人，その他出会うすべての人々に，そのような情熱をもって福音を分かとうではないか。

26人の青年の胸を打った



私たちは，21歳の「ポップ」を除くと，全員が18歳か19歳であった。同じフライトグループにもう3人いたが，カナダ空軍の厳しい基礎訓練に耐えきれず，途中で落後していた。私たちは,自分たちとそう違わない年齢で，自分の命を国に捧げて戦闘機に乗り，機関銃を手にしているドイツの青年たちに負けまいと，数ヵ月間の猛訓練を受けていたのである。

その基礎訓練を終わると，グループごとに知恵を凝らした「卒業式」を計画するのが慣例であった。どのグループも他のグループに負けないという自信があって，基礎訓練終了後のフライトパーティーが，訓練兵たちの実力を証明する場と目されていた。

私たちのフライトグループも例に違わず，若者らしい情熱をもって，訓練の総結集だ，自分たちがトップだ，この一晩を一生忘れられない思い出にするのだと声高に言い合っていた。そしてその日，27人全員で芝生に集合して，グループパーティーの相談をした。

そんな中で，私はとても孤独に感じた。フライトグループが編制されてからそのような気持ちになったのは初めてで，もうそのグループから抜けたいとさえ思った。行くなら一番高級なナイトクラブだと言いながら笑い合う仲間たちの表情には，一番の楽しみはこれだという興奮が彼らの表情にありありと感じられた。何をしたいかみんなの意見を聞こうという提案があった。そして，5，6人がこれこそ一番だと思う考えを述べたあと，だれかが「グリーンの意見を聞こうぜ」と言った。

私はグループでただひとりの末日聖徒で，だれにも何も言いたくない気持ちだった。ただその場を逃れたい一心だった。教会員でないほかの26人に，自分が毎日曜日ほかのフライトグループの末日聖徒と一緒に通っている教会の支部のことを，どう言って説明したらよいのか。毎日曜日の夜伝道本部に招かれて食事をし，ピアノを囲んで宣教師たちと一緒

に歌を歌って，最終電車で消灯時刻に間に合うように兵舎に帰って来る。その時の気持ちを，どのように説明できるというのか。ナイトクラブのとびきり楽しいパーティーを計画している26人の仲間たちに，その日曜日はきっと寒々しい気分で兵舎に帰ることになるだろうと言えたものか。兵舎に帰るや一番先に耳に飛び込んで来るのが「愛」を茶化したからかい言葉で，毎日曜日兵舎の入口に足を踏み入れるのがいやなことを，仲間はよく承知しているはずだ。

そのような思いが次々と心をよぎり，最後に落ち着いたのが，「彼らには理解してもらえない。彼らにとってぼくの意見なんかどうってことはないんだ。多分，鼻であしらうか，笑いとばすかだ。結局は一番興味のあることをするんだ。だから僕が何を言ったところで無意味だ」という考えにいたった。しかし，フライトパーティーに出なくてもすむような，何か良い提案をしなければならなかった。私は自分に腹を立てた。何ヵ月もチームとして一緒に訓練を受けて来たというのに，ここに来て突然仲間から抜けなければならないのである。どうにもしようのない状態に自分を追いつめた仲間たちにも腹が立った。彼らは私にフライトパーティーのお荷物という烙印(らくいん)を押そうとしており，一方私は，私の参加を促すようなパーティーを計画できない仲間だとすでに彼らのことを決めつけてしまっていたのである。

「さあ，グリーンの意見を聞こう。」

「そうだ，そうだ。グリーン，君はひと言もしゃべっちゃいないぜ。君なら何をしたい？」

私は深呼吸をひとつして，目の前の芝生を見つめたまま，ややむっつりとした表情で言った。「うん，ぼくがフライトパーティーに出るとすれば……上品な女の子を連れて……タバコは吸わないし……口汚ないことは言わない。……」私はだれをも見ようとせず，反論されることを予期しながら身を固くしていた。ところが意外だった。

しばらくの間しーんとして，芝生の上にピンがひとつ落ちても聞こえるような静けさだった。それから，円くなってすわった向かい側のだれかが，「ええと……」と話し出した。

それを切っ掛けとして，全員が次々と意見を述べた。こうして私は，俗っぽい遊びを楽しみとする仲間たちから身を引く退却宣言をすることができたのである。

「そうだな。……ぼくもきれいな女の子を連れてきたいな。……」

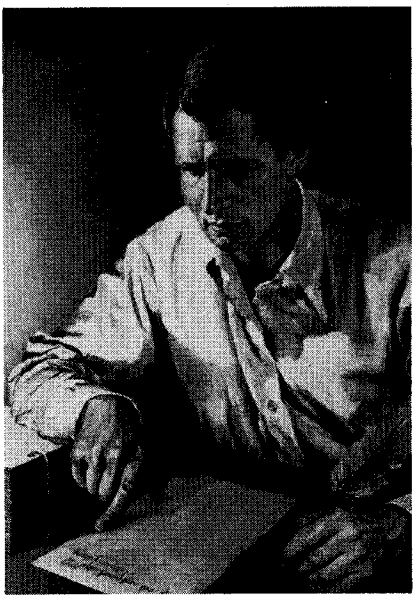
そのそばから，「そうさ，ぼくだって。」

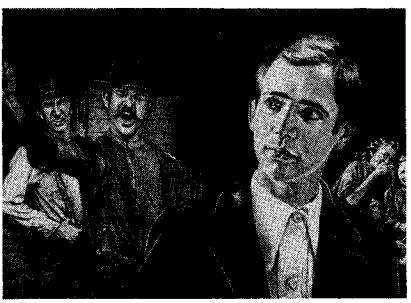
またしばらく沈黙があり，右の方から，「グリーンをパーティーの幹事に推薦するよ」と声があった。ほかにはだれも推薦されなかった。

1週間後，フライトグループの27人は，それぞれ盛装した相手を連れてパーティーに参加した。酒はなかった。タバコもなかった。みだらな話もなかった。良い食べ物と良い音楽と上品なダンス……それはとてもユニークなフライトパーティーの良い思い出となった。

私ははっきりと覚えている。1944年の日差しの強いあの午後に，みんなで芝生にすわっていた時の自分の気持ちを。自分では気のつかない，26人の青年の胸を打った何かがあったことを。私は自分のことを彼らのお荷物だと考えていたのに彼らは私を尊んでくれた。そのことが私の記憶の中に今も鮮明に残っている。

末日の
予言者の
古　典





ウェントワース書簡

末日の予言者の古典

ニューヨーク州の農夫の息子ジョセフ・スミスが，1820年に受けた奇跡的な示現を初めて公表した時，周囲の人々はその出来事の重要性と，ジョセフ・スミスが無数の人々に影響を及ぼすようになるということを全く理解できなかったようである。従って，予言者ジョセフ・スミスが1844年6月27日に殉教した時，世の人々の大半は，ジョセフ・スミスによって開始されたこの業がすぐにも崩壊するであろうと思った。彼らは，ジョセフ・スミスに託された使命と業がどのようなものであるか何も知らなかったからである。

ジョセフ・スミスは，モルモン経の翻訳を終え，イエス・キリストの教会の組織を整えてからの数年間，心から関心を示す人々に喜んで自分の見神の経験を話し，福音について説き聞かせた。

予言者の日記を開くと，1842年3月1日のページにはこう記されている。「シカゴ・デモクラット新聞社の社主兼編集長のジョン・ウェントワース氏の要請で，末日聖徒イエス・キリスト教会の起原，発展，迫害，信条について，以下のような書簡を送った。私は神の導きの下に教会を設立できたことを誇りに思っている。ウェントワース氏はニューハンプシャーの歴史を書いている友人のバストウ氏にこの情報を提供したいと語っている。バストウ氏が正しくこの情報を入手し，美辞麗句で飾らずに誤りなく全文を出版してくれることを切に望む。」

予言者が送ったこの書簡は，教会では「ウェントワース書簡」として知られるようになった。七十人最高評議員会会員であり，著名な教会の学者，歴史家であるB・H・ロバーツ長老(1857—1933年)は，ウェントワース書簡についてこう述べている。「これは教会の記録文書の中で最もすぐれたものである。しかもこれは，予言者が初めて著わした文書であり，そこには偉大な末日の業の発端となった出来事が一貫した調子で述べられている。……簡潔な表現と豊かな内容……歴史文書でこれに匹敵するものはなく，教会の文書でもこれに勝るものはない。その中には数ページにわたって，教会の回復の発端となった一連の出来事と教義の概要，予言者の誕生(1805年)からこれが公表された1842年3月に至る36年間の歴史が驚くほど詳細に，記されている。そこに述べられている教会の教義の概要はそれ以後『信仰箇条』と呼ばれた。……これは神学者たちが総力を結集して教会の主張をまとめたものではない。ひとりの人が霊感を受けて書いたものである。……当教会の原則を述べたこの文書が率直で，簡潔で，明白なことは，予言者ジョセフ・スミスが神から霊感を受けていることを示す確かな証拠と言える。」(*History of the Church*「教会歴史」4：535)

信仰箇条は極めて基本的なものであり，しかも高価なる真珠やその他（宣教師が伝道に用いるカードなど）に印刷されているため，多くの人々によく知られている。しかし，これの書かれた時代にさかのぼって入念に読み返す時，新たな意義を見いだすことだろう。

私は1805年12月23日，バーモント州ウインザー郡シャロンの町で生まれました。10歳の時，両親と共にニューヨーク州パルマイラに移り，4年ほどして，そこからマンチェスターに移りました。父は農業の傍ら，私によく家畜の飼育法を教えてくれました。14歳の頃から私は，将来のために備えることの大切さと，またどのようにすれば救われるかを考えるようになりました。しかし，当時宗派間の対立が大きく，ある宗派に行けばある教えを，他の宗派に行けば他の教えをと，それぞれの宗派が自分たちの教義を擁護し，論ずるといった有様でした。すべての宗派が正しいはずはない，神がこのような混乱をお認めになるはずはないと考え，私はもっとよく調べてみることにしました。もし神が教会をお建てになったとしたら，それはいくつもの宗派に分かれるはずがないこと，またもし神がひとつの礼拝の方法，ひとつの儀式の方法を教えられたとすれば，教会の教えはひとつであり，相反する原則はないはずであると信じていたからです。

「あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願い求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう。」（ヤコブ1：5）私は神のみ言葉を信じて，このヤコブの宣言を実行することにしました。こうして私は人目を避けて森に入り，主に祈り始めました。全力をふりしぼって嘆願すると，私をとらえていた何とも知れぬ力が離れ去り，私は天よりの訪れを受けました。太陽にも増して輝く光の中に，姿かたちのよく似たふたりの御方がみ姿を現わされたのです。そして私に，どの教派も誤った教えを信じており，神の教会あるいは王国として神の目にかなうものではないと言われました。そして「どの教派にも入らないように」命じ，完全な福音が近い将来私に知らされると告げられたのです。

1823年9月21日の晩，聖書に述べられている先の約束を信じて神に祈りを捧げていると，突然部屋の中が真昼のように明るくなりました。しかし，陽の光よりもはるかに清く，はるかに栄えある現われでした。その時，私は全身にある種の衝撃を感じました。その瞬間，ひときわ明るい光に包まれたひとりの御方が私の前に立ちました。この御方は，自分は神の使いであると言い，神が古代イスラエルの民に交わされた誓約が間もなく成就されること，メシヤの再臨に備えてみ業が速やかに開始されること，完全な福音が万国に宣べ伝えられ，民に福千年の備えを促す時期が訪れたことを告げられました。さらに，この栄えある神権時代に主のみ業を成す神の器として私が選ばれたことを知らされたのでした。

ほかにも，このアメリカ大陸の原住民について，彼らがどのような民で，どこから来たか，彼らの起原や発展，文明，律法，政体の大要，また義なる行ないと邪悪さ，最終的

に民から取り上げられた神の祝福について知らされました。また，この大陸（アメリカ大陸）に住んでいた古代の予言者たちの記録を刻んだ金属版が埋められている場所を明らかにされました。このみ使いは一晩のうちに3度訪れ，同じことを繰り返し言われました。またその後も神のみ使いの訪れをたびたび受け，その都度末日に起こるはずの栄えある重大な出来事を告げ知らされました。そして1827年9月22日の朝，私は主のみ使いからその記録を受け取ったのです。

これらの記録は，金の様相を呈した金属板に刻まれていました。また各板は，幅約15センチ，縦約20センチで，普通のブリキ板ほどの厚さでした。そこにはエジプト文字がいっぱいに刻んでありました。また全体が3つの輪で本のようにとじられて1冊になっており，厚さは15センチほどでした。その一部は封じられていました。封じられていない部分の文字は，小さくきれいに刻まれていました。また本全体にわたって，その作りの古さを示す多くのしるしが見られ，彫刻技術は見事でした。胸当てに固定された弓に，2個の透明な石がはめられており，古代の人々が『ウリムとトミム』と呼んだ珍しい道具も，その記録と共に見つかりました。私はウリムとトミムを仲立ちとし，神の賜と力によって記録を翻訳しました。

この重要かつ興味深い書物の中には，古代アメリカの歴史が記されています。その歴史は，言語が乱された時バベルの塔のあった地から最初に渡ってきた民に始まり，紀元5世紀の初めに至るものです。この記録によると，その昔アメリカ大陸にはふたつの民が存在していたことがわかります。ひとつはバベルの塔のあった地から渡ってきたジェレドの民で，もうひとつは紀元前約600年にエルサレムからやってきた民です。後者はイスラエルの民で，ヨセフの子孫です。ジェレドの民は，イスラエルの民がエルサレムから渡ってきた頃に全滅し，イスラエルの民にこの地を譲り渡したのでした。後から渡ってきた民は4世紀の終りに戦いを始め，一部の民を残して滅びてしまいました。この戦いで生き残ったのが，今日この国に住むインディアンです。ほかにもいろいろなことをこの書物は語っています。救い主が復活後，このアメリカ大陸にみ姿を現わされたこと，その時，美と力と祝福をもたらす完全な福音を民に与えたもうたこと，使徒や予言者，監督，教師，祝福師を置かれたこと，また東半球の民が享受した同じ秩序，神権，儀式，賜，力，祝福が与えられたこと，人は自分の罪の結果として神のみ前から切り離されること，民と共にいた大勢の予言者の内最後の予言者に，民の歴史や予言を抄録し，それを地中に隠すようにという命令が与えられたこと，またこれが末日に世に出され，聖書と一対になって神のみ業を達成するものと

なることなどである。このモルモン経はノーブーで，あるいは巡回長老たちから購入できます。そこで,この書物についてもう少し御説明したいと思います。

この記録の発見の知らせが伝わるやいなや，虚報，誤報，中傷が風の翼に乗ったように四方に飛びました。そして暴徒や奸計をたくらむ者たちがしばしば家を襲ってきました。私は幾度か狙撃され，その度に間一髪で逃れてきました。また金版を私から取り上げるためにあらゆる策がめぐらされました。しかし，神のみ力と祝福が私と共にあり，私の証を信じてくれた人も何人かいました。

1830年4月6日，「末日聖徒イエス・キリスト教会」が，ニューヨーク州セネカ郡フェイエットで初めて組織されました。その時数名が啓示と予言のみたまによって召され，聖任されて，みたまの導くままに語り始めました。そして，弱い者が神のみ力によって強きに変えられました。さらに大勢の者が悔い改めて水に沈められ，按手を受けて聖霊に満たされました。そして彼らは示現を見，予言をし，悪霊が追い出され，病人が按手によって癒されました。その時以来，この業は急速に発展し，間もなくニューヨーク，ペンシルベニア，オハイオ，インディアナ，イリノイ，ミズーリなどの各州に教会が建てられるようになりました。ミズーリ州においては，聖徒たちがジャクソン郡に定着しました。教会に入る人の数が増し，私たちの教会は目覚ましい発展を遂げていました。広大な土地を購入し，産物に恵まれ，教会内だけでなく隣人とも平和で幸福な日々を送っていました。しかし，私たちは，真夜中に酒盛をし，安息日を破り，競馬やギャンブルに興じる隣人についていくことはできませんでした。（彼らのほとんどは社会の底辺に住む人々で，法の手を逃れるために文明社会からこの辺境の地にやって来たのでした。）彼らは初めのうちは私たちをあざ笑う程度でしたが，次第に迫害するようになり，ついには暴徒を組織して私たちの家を焼き，同胞にタールを塗って羽根をつけるに至ったのです。そればかりか，暴徒たちは法律を無視し，無残にも聖徒たちをその地から追い出してしまいました。家を追われた聖徒たちは吹きさらしの草原をさまよい，子供たちは草原に血の足跡を残したのでした。これは気候の厳しい11月のことで，聖徒たちをおおうものは大空しかありませんでした。この事件に州政府は目を向けようともしません。土地の所有権をもっていたにもかかわらず，また法に背いたわけでもないのに，私たちには何の救済も与えられませんでした。

無残に家を追われた者の中には病人が少なくありませんでしたが，この苦難に耐え，安らぎの場を見つけなければなりませんでした。こうして大勢の者が安らかな生活を奪われ，必要な手当ても受けられずに死んでい

きました。親や夫，妻を失った人の数は知れません。農場は暴徒に占拠され数えきれない程の牛や馬，羊，豚が奪われ，家財をはじめ貯蔵品，印刷機，タイプなどが奪われたり，壊されたりしました。

聖徒の多くはクレイ郡に移り，1836年までの3年間，そこにとどまりました。暴徒の手はこの地までは届きませんでしたが，いつかやってくるだろうという恐れはだれしもが抱いていました。1836年の夏，恐れていたことが想像以上に激しく襲ってきたのです。人民集会が召集され，決議が下され，復讐と破壊の兆しが見え，事態はますます険悪になりました。ジャクソン郡の事件は序幕に過ぎなかったのです。また，ジャクソン郡の当局が仲裁に乗り出さなかったことから，暴徒たちはこのクレイ郡でも同様だろうと考えました。それが事実となり，私たちの郡当局への訴えは受け入れられませんでした。こうして私たちは多くの家財を奪われ，土地を失い，またもや家を追われたのです。

次に私たちはコールドウェルとデビース郡に移り，そこでさらに定住地を増し，迫害の手から逃れて新しい町をつくろうと考えました。ところがそこでも平和な暮らしを守ることはできませんでした。1838年に再び暴徒の襲撃を受けました。そればかりか，ボッグス知事は撲滅令を出し，その命令の下に郡全体にまたがって組織された強盗団に牛や羊，豚などを盗まれました。また，大勢の聖徒が殺害され，婦人の貞操が奪われたのです。その上，剣を突きつけられていたので，財産譲渡の証書に署名せざるを得ませんでした。次

から次へと浴びせられる人間とも思えない邪悪な略奪者の卑劣な行為に耐えて，12,000ないし15,000の人男女，子供が自分たちの憩いの家を追われ，所有地を奪われて，家も友達も安らぎもないまま（厳冬の下で）流浪の民となり，温かく穏やかな地，残忍な者のいない地に逃難所を求めてさまよい歩きました。寒さと苦難のために病人が続出し，死ぬ者も多く，夫や子供，親を失った者も少なくなく，貧困者も数えきれないほどでした。ミズーリ州での卑劣で残忍な不法行為がもたらした不正や虐待行為，殺人，盗み，苦難，悲しみのすべてを今ここに書き連ねることはとうていできません。

先に申し上げたような状態で，私たちは1839年にイリノイ州に入りました。そして私たちはここで歓待を受け，法律に従って正しい扱いを受けることができました。こうして私たちはハンコック郡に「ノーブー」という市を建設する事業に着手したのです。市の人口は6,000ないし8,000で，周囲のどの郡よりも大きく，もちろん州最大の市でした。私たちは市の憲章や軍務に関する憲章を定め，現在1,500名から成る軍隊を組織しています。また，教育制度や農業と工業に関する制度も定めました。私たちは独自の法律と行政官の下に，他の自由市民が享受しているすべての特権に浴しています。

迫害が真理の進展を止めることはありませんでした。かえって迫害が拍車となり，真理は急速に広まっていきました。中傷と非難のまっただ中を，教会の長老たちは真理に対する確信と誇りをもって合衆国のあらゆる州に出向き，福音の種をまいたのでした。そして福音は町や村に広まり，そう明で気高く，愛国心に富んだ市民が，神の戒めに従い，福音の神聖な真理による統治を受けるようになったのです。また，真理は合衆国内にとどまらず，英国やアイルランド，スコットランド，ウェールズにまで広まり，1840年には宣教師が派遣され，5,000人以上の人が真理の旗の下に集まりました。こうして今では各地に大勢の会員がいます。

私たちの宣教師は，ドイツやパレスチナ，オランダ，オーストラリア，東インドなど様様な国々へ出で立ち，今や真理の旗が掲げられています。いかなる汚れた者の手も，このみ業の発展を止めることはできません。迫害は威を振い，暴徒は連合し，軍隊は集合し，中傷の風が吹き荒れるかもしれません。しかし神の真理は大胆かつ気高く，悠然と出で立ち，あらゆる大陸を貫き，あらゆる地方に至り，あらゆる国に広まり，あらゆる者の耳に達し，神の目的は成し遂げられるでしょう。かくして，大いなるエホバは，み業は成ったと告げられることでしょう。

われらは，永遠の父なる神と，その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。

われらは，人は皆各々其身にてなしたる罪

に対して罰を受け，アダムの咎(とが)に対して罰を受けざることを信ず。

われらは，キリストの贖罪により，すべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず。

われらは，福音の第一原則と儀式とは

第1．主イエス・キリストを信ずる信仰

第2．悔い改め

第3．罪の赦しを受くるために水に沈めらるるバプテスマ

第4．聖霊の賜を授かるための按手礼

なることを信ず。

われらは，福音を宣べ，且つその儀式を執り行うためには，啓示と，権威ある者の按手により，神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。

われらは，教会には，初期の教会に在りたると同一の組織，すなわち使徒，予言者，監督，教師，祝福師等のあるべきことを信ず。

われらは，異言を語る力，予言する力，啓示，示現を受くる力，病を医す力，異言を釈く力等の賜あることを信ず。

われらは，正確に翻訳されたる限り，聖書は神の御言葉なりと信ず。またモルモン経（英文）も神の御言葉なりと信ず。

われらは，すべて神のこれまでに啓示したまいしこと，すべて今啓示したもうことを信じ，なお今より後，神の王国につきて多くの偉大にして重要なることを啓示したもうことを信ず。

われらは，イスラエル人は，文字通りに四方より集合し，その十支族の元に立ちかえることを信ず。われらは，シオン（新エルサレム）はアメリカ大陸に建てられ，キリストは御自ら地上に王となりて治めたまい，地球は元にあらたまりて楽園の栄えを受くることを信ず。

われらは，自らの良心に従い，全能なる神を礼拝する特権ありと主張す。また，われらは，すべての人々にこの特権を許し，何所なりとも，如何様なりとも，または何なりともこれを礼拝することを妨げず。

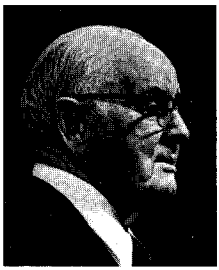
われらは，王，大統領，統治者，長官に従うべきを信じ，また法律を守り，敬い，支うべきを信ず。

われらは，正直，真実，貞潔，慈善，高徳なるべきこと，およびすべての人に善を行うべきを信ず。まことにパウロの訓戒に従うというを得べく，われらはすべてのことを信じ，すべてのことを望む。すでに多くのことを堪え忍びたれば，あらゆることを堪え忍び得んことを望む。もし何にても，徳高きこと，好ましきこと，よき聞えあること，あるいは褒(ほ)むべきことあらば，われらはこれらをたずねもとむるものなり。

敬　具

ジョセフ・スミス

（*History of the Church*「教会歴史」4：535）



「私を覚えていらっしゃいますか。」

スペンサー・W・キンボール

罪を犯した人々の歩む道はふたつしかない。

ひとつは，良心を麻痺させ，精神安定剤を用いて感覚を鈍らせることである。しかし，完全に罪を忘れ去ることはできない。もうひとつは，悔い改めをし，生活を変えることである。しかし，アルマが語っているように，悔い改めなしには赦しはないし，苦しみの伴わない悔い改めはないのである（アルマ39：6参照）。ところが，多くの人々が行なっている悔い改めは，悔いる気持ちを多少覚え，天父に一，二度，短い祈りを捧げて赦しを請うだけである。しかし，重大な罪を犯した場合には，そのような祈りでは不十分である。純潔の律法を破ることは，殺人に次ぐ最も重大な罪のひとつである。もちろん，殺人は，私たちが知る限り，この世で赦されない罪である。また，純潔の律法を犯した者は必ず罰を受ける。純潔の律法を犯した者は，速やかに監督あるいは支部長のもとへ行き，心を開いて，すべての事実を監督に告げるべきである。少しの隠し立てもしてはならない……。

人の罪が赦されるのはこのような手順を踏むことによるのであって，罪を無視してはならないのである。罪を犯した者は，まず管理の権能を有する教会役員のもとへ行き，問題を明らかにしなければならない。

私は，ソルトレーク神殿で経験したちょっとした出来事についてお話したいと思う。私はひとつの儀式を終え，もうひとつの神殿結婚を執り行なうために，長い廊下を急いでいた。その時，ひとりの婦人が私の後を追って来た。彼女は，不安げな面持ちで尋ねた。「キンボール長老，私を覚えていらっしゃいますか。」私は赤面する思いであった。どうしても思い出せなかったのである。これまで，数え切れない程多くの人々にお会いしてきているので，思い出すのは難しかった。「申し訳ありませんが，思い出せません。」ところがその婦人は，失望するどころか，とてもうれしそうであった。ほっとしたように彼女は言った。「覚えていらっしゃらなくて，とてもうれしいですわ。私たち夫婦は，一度，あなたを交えて，私たちの生活を立て直すことについて夜通し話したことがあります。私たちは罪を犯し，それから脱するために苦しみもがいていました。それを正すために，あなたは一晩を費やして下さいました。」彼女は続けて言った。「私たちは悔い改めて，生活を完全に変えることができました。あなたが覚えていて下さらなかったことを，私は喜んでいます。もし使徒のあなたが私を忘れておられるのなら，救い主も私の罪を覚えていらっしゃらないことでしょう。」彼女の顔は安らいでいた。「ありがとうございました。主は，もはや私たちの罪を忘れて下さっていることでしょう。」聖典に言われているように，もし私たちが罪を完全に悔い改め，生活を全く変えるならば，主はその罪を忘れて下さることであろう。

（アムステルダム，地域大会，1976年8月7日）

聖徒の道　1978年6月20日（毎月1回20日発行）　第22巻第6号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

「私は，ヤコブの証が真実であることを悟った。すなわち『知恵に欠くる者あらば神に願うべし。然らば与えられ，然も咎めを受けざる』ことを。

私は，示現を受けたのであるからそれが事実であるのを身を以って知っている。私は神がそれを知りたもうことを知っている。私はそれを打ち消すことはできなかった。また敢て打ち消そうともしなかった。私は少くとも，本当にあったことを打ち消すならば神の怒りを受けて罪の宣告を受けることを知っている」

（ジョセフ・スミスの著　2：26，25）